



Title	＜翻訳＞アルムファッダリーヤート試訳（46-59）
Author(s)	池田， 修
Citation	アラブ・イスラム研究. 2016, 14, p. 1-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105974
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アルムファッダリーヤート試訳

— (46) アルムラッキシュ・アルアクバル —

المُرْقَشُ الْأَكْبَرُ

池田 修*

まえがき

この詩は詩人がムラード族の洞窟で詠んだものとアルアンバーリーはしている。また、『歌の書』(5, p.191) では、死に際にアスマーウに詠み聞かせたものだとある。しかし、この詩の一行目に出てくる恋人らしい女性の名前は、スライマー(Sulaymā) となっており、7-8行目に、婚約が反故になったことを述べているほかは、過去の恋の冒険を自慢したものであるから、死に瀕した状況とはかけ離れた内容となっている。おそらく、過去の恋を主題とした長詩の一部であろう。ワーフィル調、12行。

(46) テキスト

وَقَدْ كَانَ مُرْقَشٌ وَهُوَ فِي ذَلِكَ الْكَهْفِ قَالَ

- | | |
|--|--|
| فَأَرَقَنِي وَأَصْحَابِي هُجُودُ | ١- سَرَى لَيْلًا خَيَالٌ مِنْ سُلَيْمَى |
| وَأَرْقُبُ أَهْلَهَا وَهُمْ بَعِيدُ | ٢- فَبِتُّ أُدِيرُ أَمْرِي كُلَّ حَالٍ |
| يُشْبُّ لَهَا بِذِي الْأَرْضَى وَقُودُ | ٣- عَلَى أَنْ قَدْ سَمَا طَرْفِي لِنَارٍ |
| وَأَرَامٌ وَغِزْلَانُ رُقُودُ | ٤- حَوَالِيهَا مَهًا جُمُ التَّرَاقِي |
| أَوَانِسُ لَا تُرَاحُ وَلَا تَرُودُ | ٥- نَوَاعِمُ لَا تُعَالِجُ بُؤْسَ عَيْشٍ |
| عَلَيْهِنَّ الْمَجَاسِدُ وَالْبُرُودُ | ٦- يَرُحْنَ مَعًا بِطَاءِ الْمَشَى بُدًا |
| وَقُطِعَتِ الْمَوَازِيقُ وَالْعُهُودُ | ٧- سَكَنَ بِلْدَةٍ وَسَكَنْتُ أُخْرَى |
| وَمَا بَالِي أُصَادُ وَلَا أُصِيدُ | ٨- فَمَا بَالِي أَفَى وَيُخَانُ عَهْدِي |
| مُنْعَمَةٌ لَهَا فَرَعٌ وَجِيدُ | ٩- وَرُبَّ أَسِيلَةٍ الْخَدَّيْنِ بِكُرٍ |

* 大阪外国語大学 名誉教授

[池田修先生のご意向により、本号掲載の「試訳」校正は高階が担当しました。]

- ۱۰- وَذُو أَشْرٍ شَتِيتِ النَّبْتِ عَذْبٌ
نَقِيُّ اللَّوْنِ بَرَّاقٌ بَرُودٌ
۱۱- لَهَوْتُ بِهَا زَمَانًا مِنْ شَبَابِي
وَزَارَتْهَا النَّجَائِبُ وَالْقَصِيدُ
۱۲- أَنَا كَلَّمَا أَخْلَقْتُ وَصَلَا
عَنَانِي مِنْهُمْ وَصَلَّ جَدِيدُ

(46) 訳

- 1- スライマーの幻が夜私を訪れた。そのため、友らは眠っているが、私は不眠に襲われた¹⁾。
- 2- そこで、私はわが身をつらつら振り返り、遠くに住む彼女の家族のことを思い描いた²⁾。
- 3- だが、私の目はアルアルターが茂っているところで、薪が燃え上がっている火のほうに向けられた。
- 4- 焚き火の周りには、胸の膨らんだ野牛や白カモシカやガゼルのような乙女らが眠っていた。
- 5- 彼女らは安楽な暮らしをしていて、人生の苦難に触れることはない。また、未婚の乙女たちで、夕方、仕事から帰ることも、牧草地を歩き回ることもしていない³⁾。
- 6- 彼女らはサフランで染めた下着のうえを上着でまとい、夕方、うちそろい、両太ももをこすりながら、ゆっくりあるいて家路につく。
- 7- 彼女らはある土地に住み、私は別の土地に住んでいた。そのため、あらゆる言質も約束も破られた⁴⁾。
- 8- 私は約束に誠実であるのに、欺かれるのはなぜか。私は狩をしていないのに、狩取られるのはなぜか。
- 9- 頬がふくよかで、安楽に暮らす乙女らの多くには、長い髪と首が備わっている。
- 10- 歯は鋸状で、等間隔に並び、味いは甘味で、真っ白く、前歯は唾液で輝き、(口ずけすれば) 冷ややかである⁵⁾。
- 11- 私は若い頃、ひと時、彼女を愛し、由緒ある血統の雌ラクダが (私の恋文を) を届け、また、愛の詩を送ったものだ。
- 12- 思うに人とはかくのごとき者である。私は愛の衣を着古すたびに、人々の中で、新たな愛に取り付かれ苦しんだ。

1) 恋人の名前が No.45 のアスマーウではなくスライマー (Sulaymā) となっている。

2) 『歌の書』(5, p.191) には、「まえがき」で触れたように、この詩が載っているが、ʿarqubu (観察する) のところが、ʿadhkuru (思い描く) となっており、解説にもこの読みをしている者があるので、これにより訳した。

3) 「乙女らは、薪集めや羊飼いの仕事をせず、安楽に暮らしている」の意。

4) 解説では、詩人の叔父アウフ (ʿAwf) と結んだ、アスマーウとの婚約に触れたものとしている。

5) 歯が鋸状に並ぶという表現は、若さを表す。

— (47) アルムラッキシュ・アルアクバル —

المُرْقَشُ الْأَكْبَرُ

まえがき

1-5行で恋人アスマーウの住居跡を訪れて、思い出にひたる場面があるが、おそらく、かなりの脱落があったものと考えられる。6行以下は孤独な砂漠の夜旅の様子が述べられているが、梟が鳴く、焚き火をしても誰も立ち寄らず、オオカミのみが焼肉を求めてそばまで来たなど、興味ある記述が見受けられる。この詩には、かなり難解な箇所が多くあり、古い作品であることをうかがわせている。

Lyall 校訂版では18行となっているが、カイロ版では、大英博物館写本とマルズーキーの注釈書により12-13行の2行が追加され20行となっているので、タウィール調、20行の詩として訳した。

(47) テキスト

وَقَالَ الْمُرْقَشُ أَيْضًا

- | | |
|---|--|
| يُحْطِطُ فِيهَا الطَّيْرُ قَفْرٌ بَسَابِسُ | ١- أَمِنْ آلِ أَسْمَاءِ الطُّلُولُ الدَّوَارِسُ |
| قَرِيبٌ وَلَكِنْ حَبَسْتَنِي الْحَوَابِسُ | ٢- ذَكَرْتُ بِهَا أَسْمَاءَ لَوْ أَنَّ وَلِيَهَا |
| كَأَنِّي بِهِ مِنْ شِدَّةِ الرَّوْعِ آنِسُ | ٣- وَمَنْزِلِ ضَنْكِ لَا أُرِيدُ مَبِيَّتَهُ |
| وَفِي النَّفْسِ إِنْ حُلِيَ الطَّرِيقُ الْكَوَادِسُ | ٤- لَتُبْصِرَ عَيْنِي إِنْ رَأَيْتَنِي مَكَانَهَا |
| إِلَى أَنْ تَكِلَ الْعَيْسُ وَالْمَرْءُ حَادِسُ | ٥- وَحَيْفُ وَإِسْـسَاسُ وَنَقْرُ وَهَزَّةُ |
| تَهَالِكُ فِيهَا الْوَرْدُ وَالْمَرْءُ نَاعِسُ | ٦- وَدَوِيَّةُ غَبْرَاءَ قَدْ طَالَ عَهْدُهَا |
| بِعَيْنِهَا مَتْنَسَلُ وَاللَّيْلُ دَامِسُ | ٧- قَطَعْتُ إِلَى مَعْرُوفِهَا مُنْكَرَاتِهَا |
| وَمُوقَدَ نَارٍ لَمْ تَرْمُهُ الْقَوَابِسُ | ٨- تَرَكْتُ بِهَا لَيْلًا طَوِيلًا وَمَنْزِلًا |
| كَمَا ضَرَبْتُ بَعْدَ الْهُدُوءِ النَّوَاقِسُ | ٩- وَتَسْمَعُ تَرْقَاءَ مِنَ الْبُومِ حَوْلَنَا |
| مَنْ الْأَرْضِ قَدْ دَبَّتْ عَلَيْهِ الرَّوَامِسُ | ١٠- فَيُصْبِحُ مُلْقَى رَحْلِهَا حَيْثُ عَرَسَتْ |
| إِلَى شُعْبٍ فِيهَا الْجَوَارِي الْعَوَانِسُ | ١١- وَتُصْبِحُ كَالدَّوْدَاةِ نَاطِ زِمَامِهَا |
| لَهَا قَيْمٌ سَهْلُ الْخَلِيقَةِ آنِسُ | ١٢- وَقَدَرٌ تَرَى شُمَطَ الرِّجَالِ عِيَالَهَا |
| وَلَا هُوَ مِضْبَابٌ عَلَى الرَّادِ عَابِسُ | ١٣- ضَحُوكُ إِذَا مَا الصَّحْبُ لَمْ يَجْتَوُوا لَهُ |

- ١٤- وَلَمَّا أَضَاءْنَا النَّارَ عِنْدَ شَوَائِنَا
 ١٥- نَبَذْتُ إِلَيْهِ حُزَّةً مِنْ شَوَائِنَا
 ١٦- فَأَضَ بِهَا جَذْلَانِ يَنْفُضُ رَأْسَهُ
 ١٧- وَأَعْرَضَ أَعْلَامَ كَأَنَّ رُؤُوسَهَا
 ١٨- إِذَا عَلِمَ خَلْفَتُهُ يُهْتَدَى بِهِ
 ١٩- تَعَالَتْهَا وَلَيْسَ بِدَرِّهَا
 ٢٠- بِأَسْمَرَ عَارٍ صَدْرُهُ مِنْ جِلَازِهِ
 عَرَانَا عَلَيْهَا أَطْلَسُ اللَّوْنِ بَائِسُ
 حَيَاءً وَمَا فُحْشَى عَلَى مَنْ أُجَالِسُ
 كَمَا آبُ بِالنَّهْبِ الْكَمِيِّ الْمُحَالِسُ
 رُؤُوسُ جِبَالٍ فِي خَلِيجٍ تَعَامَسُ
 بَدَا عَلِمٌ فِي الْأَلِ اعْبُرَ طَامِسُ
 وَكَيْفَ التَّمَاسُ الدَّرِّ وَالضَّرْعُ يَابِسُ
 وَسَائِرُهُ مِنَ الْعِلَاقَةِ نَائِسُ

(47) 訳

- 1- 消えかかった住居跡は、アスマーウ一家のものか。そこには野鳥の足跡が残り、荒れ果てた砂漠になっていた。
- 2- その廃墟で、私はアスマーウに思いをはせた。彼女が移り住んだところが、近くであればよかったのだが、種々な障害が私を引きとめ（彼女と会うことができなかった）。
- 3- 私は強い恐怖心を抱きながらも、夜を過ごしたくない厳しい多くの宿営地で、あえて、休息するのになれ親しんだ者のように振舞った。
- 4- (そのようなところで夜をすごすのは) 彼女（アスマーウ）が、私を見ているのであれば、私の目は彼女の居場所を見るかも知れないと思ったためである。けれども、たとえ、旅路に恐怖がないとしても、私の心の中には悪い予感がつきまとっていた¹⁾。
- 5- (私はそこへ) 緩急さまざな足取りで、旅を続けてきたのであるが、先導者があてずっぽうに案内したので、赤味を帯びたラクダどもは疲れてしまった²⁾。
- 6- しばしば、(人々は) 砂塵が舞い、こだまが鳴りわたる、人跡未踏の砂漠の中を、喉が渇いたラクダに乗って、まどろみながら、全速力で旅をした。
- 7- 私は、未知の荒野を横断して、悠然と歩む頑強で、大胆な雌ラクダに乗ってなじみのある土地へと向かったが、漆黒の夜の闇があたりを覆っていた。
- 8- その荒野では、さらに、長い夜をすごす。宿営地では火を燃やすが、火を求めて立ち寄る者は一人も現れなかった。

1) al-kawādis (単数 kādis) は「くしゃみ」のことで、アラブはこれを悪い予感として悲観的にとらえていた。Lyal校訂版では、*in khallā* となっているが、*in khalā* の意と考えられる。カイロ版では *in khullā* となっている。*khullā* は *khulliya* の珍しい用例である。構文も込み入っているが、al-kawādis は *fi n-nafsi* の主語、*makānahā* は *li-tubšira* の目的語。

2) この一行は7行の後に配置すべきもの。また、4行との間に何行か欠落していると見られる。上の句 *wajif* 以下の4つの名詞は *hāl* として対格での読み方もある。また、*ʿaʿyasu* (複数 *ʿis*) は「赤味がかかった白色ラクダ」のことで、高貴な血統を表す。かつての恋人の住まい跡を訪ねて思い出に涙を流したあと、詩人が英雄的行為を誇るのがジャーヒリーヤ詩人の常套的な手法である。英雄的行為のうち敵対者を打倒する勇者ぶりを誇示し、無人の荒野をラクダに乗って一人旅する大胆さを自慢するものが最も多く、ここでは荒野の一人旅することを誇っている。極度の気前よさや飲酒、恋の冒険などが織り込まれるものが多い。

- 9- あなたは、我らの周りで集の鳴き声を聞くだろうが、それは、まるで拍子木が打たれて、あたりの静寂を破るかのようだ³⁾。
- 10- 私のラクダの鞍を置く場所は、雌ラクダの夜半の休息所となるが、そこへ、跡形を消し去る風が吹いてきた。
- 11- 朝になると、ラクダは、適齢期の乙女らが木の枝にロープをかけたブランコのように (不安な気持ちで揺れた)⁴⁾。
- 12- あなたは(私が)しばしば大鍋で(料理をし)有力者らをもてなしたのを見ただろう。大鍋の世話役は気前よく、親切な男である⁵⁾。
- 13- 彼は友らが嫌わない限り、常に笑顔で接し、糧食を惜しみなく差し出し、およそ、眉をひそめることはない。
- 14- 私たちが肉を焼くために火を燃やすと、黒味がかった毛色の、腹をすかしたオオカミが火の近くに寄ってきた⁶⁾。
- 15- 私は恥ずかしくなって、焼肉を一切れオオカミに投げ与えた。同席者に不作法に振舞うのは私のとるところではない。
- 16- すると、オオカミは肉片を咥え、頭を下げながら嬉々として引き揚げて行ったが、まるで不屈な勇者が戦利品を携えて家路をたどる姿のようであった。
- 17- 山々が (蜃気楼のなかで) 姿を現したが、その頂は湾内で浮き沈みしているかのようだ⁷⁾。
- 18- 道案内をしてくれる標識を後にすると、蜃気楼のなかに消えかかった灰色の次の標石が現れた。
- 19- 私はラクダに、最後の余力を振り絞って進むように仕向けた。私が求めたのはミルクではない。乳房が枯れているのに、ミルクが求められようか⁸⁾。
- 20- すなわち、私はラクダに褐色のむちを当てた。むちの端の皮ひもは擦り切れ、残余の部分は取っ手に (紐をつけて手首に) ぶらさげている⁹⁾。

3) nāqūs (複数 nawāqīs) 「拍子木」。シリアのキリスト教徒が礼拝を呼びかけるときに鐘を打つのに用いる。

4) 解説だけでは意味がとれない難解な一行である。ラクダが不安な夜を過ごす様子をほのめかしたもののようだ。

5) 詩人は家族を養うだけでなく、有力者ももてなし、野獣にまで気前よさを示すと以下で語っている。

6) ʔatlasu l-lawni 「黒っぽい色」。これはオオカミを表す。

7) ʔalam (複数 ʔaʔlām)。解説では「山」としているのでこれに従ったが、18行では「標識」となっており、標識の方が適当と思われる。

8) taʔālaltu-hāには二義がある。ひとつは「最後の乳をしぼること」、今ひとつは、「余力を出し切らせること」。後者で訳した。

9) 「ラクダに当てたむち」のことをのべているが、上の句の構文が複雑で意味の理解が困難。

— (48) アルムラッキシュ・アルアクバル —

المُرْقَشُ الْأَكْبَرُ

まえがき

11行よりなる短い詩で、欠落部分が多くあったと思われる。1-5行はラクダで荒野を移動する婦人のことを述べているが、5行以下に脱落があったと推定される。6-11行は、ラフム朝のアルムンジル三世 (505-554) に不当な扱いを受け、追放されたことを氣にとめていないとの伝言となっている。そのうち、8-11行が詩人自身のことを誇っており、この部分だけが失われず、詩集に組み込まれたのかもしれない。このような中途半端な姿になっているのは、古詩の宿命でもある。ハフイーフ調、11行。

(48) テキスト

وَقَالَ الْمُرْقَشُ الْأَكْبَرُ أَيْضًا

- | | |
|--|--|
| شَبَّهَهَا الدَّوْمُ أَوْ خَلَايَا سَفِينٍ | ١- لِمَنِ الطُّغْنُ بِالضُّحَى طَافِيَاتٍ |
| وَبِرَاقِ النَّعَافِ ذَاتِ الْيَمِينِ | ٢- جَاعِلَاتٍ بَطْنَ الضَّبَاعِ شِمَالًا |
| نُ عَلَى كُلِّ بَازِلٍ مُسْتَكِينٍ | ٣- رَافِعَاتٍ رَقْمًا تَهَالُ لَهُ الْعَيْدُ |
| يَةِ حَرْفٍ مِثْلَ الْمَهَاةِ دُقُونٍ | ٤- أَوْ عَلَاةٍ قَدْ دُرِبَتْ دَرَجَ الْمِشْدِ |
| ظُرْنَ صَوْنًا لِحَاجَةِ الْمُخْزُونِ | ٥- عَامِدَاتٍ لِحُلِّ سَمْسَمٍ مَا يَنْدُ |
| غَيْرَ مُسْتَعْتَبٍ وَلَا مُسْتَعِينِ | ٦- أَبْلَغَا الْمُنْذِرَ الْمُنْقِبَ عَنِّي |
| جِ وَأَهْلِي بِالشَّامِ ذَاتِ الْفُرُونِ | ٧- لَا تَ هَنَّا وَلَيْتَنِي طَرَفَ الزُّرْ |
| صَدَقَتْهُ الْمُنَى لِعَوَضِ الْحَيْنِ | ٨- بِأَمْرِي مَا فَعَلْتَ عَفَّ يَوْسُ |
| حِزُ بِالسَّكْتِ فِي ظِلَالِ الْهُونِ | ٩- غَيْرَ مُسْتَسْلِمٍ إِذَا اعْتَصَرَ الْعَا |
| لِ تَشَكَّى الْجَادَ بَعْدَ الْخُزُونِ | ١٠- يُعْمِلُ الْبَازِلَ الْمُجَدَّةَ بِالرَّخْدِ |
| وَحُسَامٍ كَالْمِلْحِ طَوَعَ الْيَمِينِ | ١١- بَفَتَى نَاحِفٍ وَأَمْرٍ أَحَدٍ |

(48) 訳

1- 婦人らをハウダジュ (乗り籠) に乗せたラクダは誰のものか。それは午前中の霞に

- 浮かぶダウムヤシの樹が巨大な船団のようである¹⁾。
 2- それはアッバディーウ (ハイエナ) 溪谷を左にし、石ころまじりのアンニアーフ (山の斜面) を右にして進んでいる²⁾。
 3- 人目を驚かすような美しいヤマン製のまだら模様の垂れ幕が、数えて9歳になったおとなしい雄ラクダ各々の背にかけられていた³⁾。
 4- また、かなとこのように頑強な雌ラクダはあらゆる歩調が取れるように鍛えられていて、すらりとして筋骨たくましく、野牛のように俊足である⁴⁾。
 5- ラクダの一行はサムサムの砂道をめざし、(恋に焦がれて) 悲しんでいる男の呼び声にも意を払わず、(立ち止まってはくれない)。
 6- その方ら両名よ、私の消息を求めているアルムンジルに (私の言葉を) 伝えよ。私は彼の恩恵も助けも求めている、と⁵⁾。
 7- そなたはしかるべき時をわきまえずに、不当に及んだ。わが一族は長い髪を編んで垂らしている (ギリシヤ人支配下の) シリヤに住んでおり、出来うれば、わが身がアズズジュの近くにあればよいのだが⁶⁾。
 8- そなたは、ひかえめな私欲のない (私のような) 男に (不当な) 扱いをしたが、しかるべき時に彼 (私) の望みはかなえられよう。
 9- 無能な者が卑屈の影に身を寄せて沈黙するようなときでも、彼 (私) は決してくじけない。
 10- すなわち、彼は9歳に達した雌ラクダを駆使する。そのラクダは人を背に乗せて早がけし、ごつごつした荒野のあと高地に (駆け上がる労苦を) 訴える⁷⁾。
 11- ラクダは、細く引き締まった若い戦士と軽い荷物と塩のように白く輝いた剣を載せているが、剣は右手の命令に良く従う⁸⁾。

1) dawm 「ダウムヤシ」はアラビア半島の高地の溪谷に野生している巨木で、エジプトおよびスーダンでも良く知られている。婦人を乗せたラクダの一行を *khalāyā safīni* すなわち「海行く巨大船団」にたとえる手法は、詩人の兄弟の孫にあたるタラファがムアッラカ3行で真似ている。
 2) アッディバーウ (*al-dibāʿ*)、アンニアーフ (*al-niʿāf*) はともに地名を表す固有名詞であろう。
 3) 雄ラクダは雌ラクダより従順で婦人用に用いられたが、次の4行目では雌ラクダのことが述べられている。
 4) *dhaqūn* は「あごが長い」の意味もあるが、「俊足」の意味で訳した。
 5) 6行と7行は小ムラクキシユの作だとする説がある。
 6) *lāta hannā* 「しかるべき時をわきまえずにある行為に及ぶこと」と解説にあるが、この一行は意味がよく分らない。
 7) *bāzil* 「満8歳を過ぎ9歳に達したラクダ」のことで、雄雌に共通して用いられる。
 8) 「刀身の白さ」を「塩」にたとえる例は No.20, 24行を参照のこと。

— (49) アルムラッキシュ・アルアクバル —

المُرْقَشُ الْأَكْبَرُ

まえがき

この詩も12行という短いものであるが、多くの欠落部分が生じた結果であろう。1-5行では恋人アスマーウがかつて住んでいた廃墟を訪ねて、思い出に涙する場面が語られる。6-10行には雌ラクダの描写があり、ラクダを野牛にたとえている。11-12行では野牛を取り上げている。サリーウ (sarīʿ) 調、12行。

(49) テキスト

وَقَالَ الْمُرْقَشُ الْأَكْبَرُ أَيْضًا

- | | |
|--|---|
| إِلَّا الْأَثَافِيَّ وَمَبْنَى الْخَيْمِ | ١ - هَلْ تَعْرِفُ الدَّارَ عَفَا رَسْمُهَا |
| لَدَمْعٍ عَلَى الْحَدَّيْنِ سَحٌّ سَجَمِ | ٢ - أَعْرِفُهَا دَارًا لِأَسْمَاءَ فَالِ |
| مُتَفَفِّرَةً مَا إِنْ بِهَا مِنْ إِرَمِ | ٣ - أَمْسَتْ خَلَاءَ بَعْدَ سُكَّانِهَا |
| كَالْفَارِسِيِّينَ مَشَوْا فِي الْكُمِ | ٤ - إِلَّا مِنَ الْعَيْنِ تَرَعَى بِهَا |
| لَهُمْ قِيَابٌ وَعَلَيْهِمْ نَعَمِ | ٥ - بَعْدَ جَمِيعٍ قَدْ أَرَاهُمْ بِهَا |
| مَا إِنْ تُسَلَّى حُبَّهَا مِنْ أَمَمِ | ٦ - فَهَلْ تُسَلَّى حُبَّهَا بَازِلِ |
| ذَاتُ هَيْبٍ لَا تَشْكِي السَّامِ | ٧ - عَرَفَاءُ كَالْفَحْلِ جَمَالِيَّةِ |
| أَصْرُهَا تَحْمِلُ بِهِمَ الْعَنَمِ | ٨ - لَمْ تَقْرَأِ الْقَيْظَ جَنِيَّةَا وَلَا |
| وَسَوَّغَتْ ذَا حُبِّكَ كَالْإِرَمِ | ٩ - بَلْ عَزَبَتْ فِي الشُّوْلِ حَتَّى نَوْتُ |
| عَدُوَّ رَبَاعٍ مُفْرِدٍ كَالزُّلَمِ | ١٠ - تَعْدُو إِذَا حُرِّكَ مَجْدَافُهَا |
| أَكْرَعُ تَخْنِيفُ كُلُّونِ الْحَمَمِ | ١١ - كَأَنَّهُ نِصْعُ يَمَانٍ وَبِالِ |
| مُخْتَلِطٍ حُرْبُهُ بِالْيَنَمِ | ١٢ - بَاتَ بَغِيْبٍ مُعْشِبٍ نَبْتُه |

(49) 訳

- 1- 跡形が消えた住まいを君は知っているか。そこには土鍋をのせた鼎石と、テントを支えた木組みのみが残っている。
- 2- だが、私はそれがかつてアスマーウが住んでいた住まいであったことを知っている。

- (これを思い出すと) 涙が私の両頬にどっと流れた¹⁾。
- 3- 住まいで暮らしていた人たちが去った後、廃墟となり、人影は絶え、荒れ果ててしまった²⁾。
- 4- そこには、ただ縁なし帽をかぶったペルシャ人がすまして歩むように、静かに草を食べる目の大きな野牛の姿があるだけだ³⁾。
- 5- 私はそこでかつて、多くの人々を見たことがあるが、彼らは高価な皮製のテントを備えていて、夕方になるとラクダの群れが彼らの元に帰ってきたものだ。
- 6- 満8歳になった (私の) 雌ラクダが、彼女の愛を忘れさせてくれるだろうか。否、些細なことで彼女の愛は忘れられるものではない。
- 7- この雌ラクダは種ラクダのように首が高く伸び、雄ラクダのように大きく活発で疲れを訴えることもない。
- 8- このラクダは真夏に子を孕むこともなく、私は子羊を運ばせようとして、乳房を紐で縛ったりはしない⁴⁾。
- 9- 否、雌ラクダはミルクが出ない他の雌ラクダらと遠くへ行って草を食べ、丸々と太り、背のこぶは、筋模様がついた山のように盛り上がっている。
- 10- 雌ラクダはむちが振られると、細く引き締まった4歳になった雄野牛が (獵師を恐れて) 群れから離れて占い矢のごとく逃走するように、疾駆する。
- 11- 雄野牛はヤマンの純白の衣のように真っ白いが、すねの辺りは炭のような黒い斑点で色どられている⁵⁾。
- 12- 野牛は草の豊富な窪地に身を潜めて夜を過ごすが、そこにはフルブサ草がヤナマ草に混じって生えている⁶⁾。

1) アスマーウ (ʾAsmā) は詩人の叔父アウフ・アルブラク (No.45, 血統図参照) の娘。

2) ʾiram 「誰も」は古語で、辞書には ʾiram または ʾarim (複数 ʾārām) 「砂漠の中の標石」とある。

3) 野牛やオリックスの真っ直ぐ伸びた角は qalansuwa 「縁なし帽」にたとえられる。

4) 「優れた雌ラクダには長旅に備えて子を産ませないし、羊の子らを運ぶような仕事もさせない」の意。

5) 野牛の体は白いが足には黒斑があり、顔のあたりは黒くその上部は赤味をおびている。

6) 2種の草は、ラクダや羊を太らすのに効果的とされている。ghayb 「隠れ家、窪地」は ghayth 「雨に恵まれた草原」との伝承もある。

— (50) アルムラッキシュ・アルアクバル —

المُرْقَشُ الْأَكْبَرُ

まえがき

全体で17行の詩であるが1-10行が愛の序詩となっている。ここでは詩人が一員をなすテント群に住んでいた多数の女性が一族とともに移住し、詩人と別れる場面、彼女らの会話、移住先でラクダから降りるまでにテントが用意されるなどが述べられている。そのあと自部族の気前よさ、マイシル（賭け矢）ゲームおよびラクダの描写がなされている。 タウィール調、17行。

(50) テキスト

وَقَالَ أَيُّضًا مُرْقَشُ الْأَكْبَرُ

- | | |
|---|---|
| أَذَانٍ بِهِمْ صَرَفُ النَّوَى أَمْ مُحَالِ فِي | ١- أَلَا بَانَ حَيْرَانِي وَلَسْتُ بِعَائِفِ |
| عِلَالَةٍ مَا زَوَّدَنَ وَالْحُبُّ شَاعِفِي | ٢- وَفِي الْحَيِّ أَبْكَارُ سَبَيْنَ فُؤَادِهِ |
| لِشَجْوٍ وَلَمْ يَحْضُرَنَّ حُمَى الْمَزَالِفِ | ٣- دِقَاقُ الْخُصُورِ لَمْ تُعَفَّرْ قُرُونُهَا |
| حِسَانُ الْوُجُوهِ لَيِّنَاتُ السَّوَالِفِ | ٤- نَوَاعِمُ أَبْكَارٍ سَرَائِرُ بُدْنٍ |
| لَهُ رَبْدٌ يَعْيَا بِهِ كُلُّ وَاصِفِ | ٥- يُهْدَلْنَ فِي الْأَذَانِ مِنْ كُلِّ مُذْهَبٍ |
| مَكَانَ النَّدِيمِ لِلنَّجِيِّ الْمُسَاعِفِ | ٦- إِذَا ظَعَنَ الْحَيُّ الْجَمِيعُ اجْتَنَبَتْهُمْ |
| يُعَوِّجَنَّ مِنْ أَعْنَاقِهَا بِالْمَوَاقِفِ | ٧- فَضْرَنَ شَقِيحًا لَا يُبَالِيَنَّ غِيَّهُ |
| خَفِيضًا فَلَا يَلْعَى بِهِ كُلُّ طَائِفِ | ٨- نَشْرَنَ حَدِيثًا آنَسَا فَوَضَعْنَهُ |
| فَكَانَ النُّزُولُ فِي حُجُورِ النَّوَاصِفِ | ٩- فَلَمَّا تَبَنَّى الْحَيُّ جِئْنَ إِلَيْهِمْ |
| مُزَيَّنَةً أَكْنَافُهَا بِالزَّخَارِفِ | ١٠- تَنْزَلْنَ عَنْ دَوْمٍ تَهْفُ مَثُونُهُ |
| إِذَا أَشْجَذَ الْأَقْوَامَ رِيحُ أَطَائِفِ | ١١- بِوَدِّكَ مَا قَوْمِي عَلَى أَنْ هَجَرْتُهُمْ |
| وَعَادَ الْجَمِيعُ نُجْعَةً لِلزَّعَانِفِ | ١٢- وَكَانَ الرَّفَادُ كُلُّ قِدْحٍ مُقَرَّمٍ |
| لِلْحَمِّ وَأَنْ لَا يَذَرُوهَا قِدْحٌ رَادِفِ | ١٣- جَدِيرُونَ أَنْ لَا يَحْبِسُوا مُجْتَدِيَهُمْ |
| مَشَايِطُ اللَّأْبَدَانِ غَيْرُ التَّوَارِفِ | ١٤- عِظَامُ الْجَفَانِ بِالْعَشِيَّاتِ وَالضُّحَى |
| فَوَاحِشٌ يُنْعَى ذِكْرُهَا بِالْمَصَائِفِ | ١٥- إِذَا يَسَرُّوا لَمْ يُورِثِ الْيَسْرُ بَيْنَهُمْ |
| خُنُوفٌ عَلَنَدَى جَلْعَدٍ غَيْرُ شَارِفِ | ١٦- فَهَلْ تُبْلَغُنِي دَارَ قَوْمِي جَسْرَةً |

١٧- سَدِيسٌ عَلَتْهَا كَبْرَةٌ أَوْ بُؤِزِلَ جَمَالِيَّةٌ فِي مَشْيِهَا كَأَنَّ قَاذِفِ

(50) 訳

- 1- ああ、私の隣人たちは移住してしまった。私は鳥占い師ではない。ゆえに、彼らが近くに移るのか、遠くに旅立つのか、(告げられない)¹⁾。
- 2- 部族のなかには乙女らがいて彼(私)の心を取りこにした。彼女らが旅のために用意した食料を見て気を紛らわそうとしたが、恋心が私(の胸)を焦がした²⁾。
- 3- 彼女らの腰は細長く、ふさふさとした髪は、悲しみに(さらされ)埃を被ることもなく、熱病にかかる農村に住むこともない³⁾。
- 4- (彼女らは) 安楽に育まれた、部族より抜きの乙女らで肉づきがよく、顔は美しく、首は柔らかである。
- 5- 彼女らは、耳から黄金の耳飾を垂らしており、それが揺れるさまの魅力は筆舌に尽くし難い。
- 6- 部族の皆の者が旅立ちするときには、私は気の合う仲間が隣の友人と話し合うかのよう、一行とは離れたところに身をおく⁴⁾。
- 7- 彼女らは、哀れな男(詩人)の視線を彼女らに引き付けたまま、彼の乱れる心など意に介せず、ラクダの首を宿駅へと向けてしまう⁵⁾。
- 8- 彼女らは互いに親しく話し合うが、低い声で話すため、そばを通る者にはほとんど聞き取れない。
- 9- テントが建てられると、彼女らは彼らの方にラクダを近づけ、(乗り籠から)下女の腕に支えられて降りる。
- 10- 彼女らは、野生の椰子の巨木のような背の高い乗り籠から下りてくるが、その内部は風ではためいており、その側面は装飾がほどこされていた⁶⁾。
- 11- 貴女の神ウッドに誓って、一体わが部族は何者であるか。(どのように暮らしているのだろうか)。もっとも、私はウザーイフ山から吹き降ろす寒風が人々が悩ましているとき、彼らのもとから去ったのだが⁷⁾。
- 12- 各自が持ち寄る食べ物は、歯で刻み目がつけられたマイシル(賭け矢) ゲームによるものだ。各地に散らばっていた人々は、少数となっていた部族のもとに食べ物を求

1) ʿāʾif 「鳥占い師」は、鳥を脅して飛び去る方向や鳴き声などで吉凶を占う(ʿiyāfa)。

2) fuʾāda-hu 「彼の心」、shāʾif-i 「私(の胸)を焦がす」。両者で人称の転換が見られる。

3) 「毛髪が埃を被る」とは「悲しい目にあう」ことをさす。彼女らが砂漠に住むのは、「村落では熱病の恐れがあるため」としている点が注目される。

4) 詩人は自らほめた乙女らへの関心を他人に悟られないように、少し離れたところに身を置き無関心を装う。

5) mawāqif < 単数 mawqif 「休息所、宿駅、集合場所」の意味で訳したが、「象牙の腕輪」という意味もある。後者だと、「ラクダの首の向きを変える際、象牙の腕輪をちらりと見せる」というような訳になる。

6) アルアンバーリーは「dawm (ダウムヤシの巨木)」を「鞍」としているが「女性用の乗り籠」ハウダジであろう。

7) ʿuzāʾif 「山から吹き降ろす風」は「シリヤからの冷たい北風」。wudd または wadd はコーランにも登場する古代の偶像神のひとつ。

めて帰ってきた⁸⁾。

- 13- 彼らは肉の分け前にあずかるために訪れる者をさし止めたり、(ゲームに) 遅れて来た者に賭け矢を拒むようなまねはしない。
- 14- 彼らのお椀は、夕方も朝方もパンや肉を入れるために大きく、ラクダの屠殺人は (貧者らのために) ラクダを多く殺すが、彼ら自身は安楽を好むものではない⁹⁾。
- 15- 彼らが (冬に) マイシル (賭け矢) ゲームを開帳するときには、夏の集会で悪評が立てられるようなけちな振る舞いはしない¹⁰⁾。
- 16- 背が高く前脚が柔軟で、頑強で引き締まり、老いぼれていない雌ラクダは、私をわが部族の館へ送り届けるのか。
- 17- このラクダは満7歳だが、それ以上に年老いて牙が伸びたように見えるが、実は雄ラクダのように力強く、疾駆する馬のように猛進する。

8) No.9「まえがき」にあるとおり、マイシルは10本の矢でゲームが行われる。10本の矢をバッグに混ぜ入れ、それぞれの矢に名がつけられ、歯で噛んで刻み目をつけておく。これによりラクダのどの部分が割り当てられるかが示されている。ゲームは食糧が乏しくなる冬期に行われる。当たったラクダの肉は貧者に与えられ、勝者が取り込まない。次の13行では、ゲームに遅れて来た者にも参加させるため、それだけ多くのラクダが犠牲になることをほのめかしている。夏季の集結場所は15行目で *maṣāʾif* と呼ばれている。

9) つまり「詩人の部族は戦闘や復讐に熱心で、安楽をむさぼらない」と自慢している。

10) 注8で述べたように、冬の厳しいときに開帳するマイシル (賭け矢) ゲームは、貧者らに食べさせるのが目的で、これをおざなりにすると、夏の集結地でけちだという悪評が立てられる。

— (51) アルムラッキシュ・アルアクバル —

المُرْقَشُ الْأَكْبَرُ

まえがき

序詩では恋人が会うことが出来ない遠隔地に住んでいることを悲しみ、涙を流す場面があり (1-4行)、彼女の名前は3行目にハウラ(Khuwayla は Khawla の縮小形) とある。次いで、かつては女性と飲酒に興じたことを語り (5-6行)、詩人が勇敢な騎士であったこと、すぐれた馬に乗っていたこと (7-9行) に触れ、最後に自部族を誇っている。カーミル調、11行。

(51) テキスト

وَقَالَ الْمُرْقَشُ الْأَكْبَرُ أَيْضًا

- | | |
|---|---|
| مَحْسُورَةً بَاتَتْ عَلَى إِغْفَائِهَا | ١- مَا قُلْتُ هَيَّجَ عَيْنَهُ لِئُكَاثِهَا |
| مَا بَيْنَ مُصْبَحِهَا إِلَى إِمْسَائِهَا | ٢- فَكَأَنَّ حَبَّةَ قُلْفُلٍ فِي عَيْنِهِ |
| حَالَتْ فُرَى نَجْرَانَ دُونَ لِقَائِهَا | ٣- سَفَهَا تَذَكُّرُهُ حُويلَةَ بَعْدَ مَا |
| فِي دَارِ كَلْبٍ أَرْضِهَا وَسَمَائِهَا | ٤- وَاحْتَلَّ أَهْلِي بِالْكَثِيبِ، وَأَهْلُهَا |
| خَوْدٍ كَرِيمَةٍ حَيَّهَا وَنِسَائِهَا | ٥- يَا حَوْلَ مَا يُدْرِيكَ رُبَّتْ حُرَّةٌ |
| قَبْلَ الصَّبَاحِ كَرِيمَةٍ بِسَبَائِهَا | ٦- قَدْ بَتَّ مَالِكُهَا وَشَارِبَ رِيَّةٍ |
| تَمْضِي سَوَابِقُهَا عَلَى عُلوَائِهَا | ٧- وَمُغِيرَةٍ نَسَجَ الْجَنُوبُ شَهْدَتِهَا |
| خُلِقَتْ مَعَاقِمُهَا عَلَى مُطَوَائِهَا | ٨- بِمُحَالَةٍ تَقْصُ الدُّبَابَ بِطَرْفِهَا |
| تَهْدِي الْجِيَادَ غَدَاةَ غِبِّ لِقَائِهَا | ٩- كَسَيْبَةِ السَّيْرَاءِ ذَاتِ عَلَالَةٍ |
| فَلَنَحْنُ أَسْرَعُهَا إِلَى أَعْدَائِهَا | ١٠- هَلَّا سَأَلْتَ بِنَا فَوَارِسَ وَائِلٍ |
| وَلَنَا فَوَاضِلُهَا وَمَجْدُ لَوَائِهَا | ١١- وَلَنَحْنُ أَكْثَرُهَا إِذَا عُدَّ الْحَصَى |

(51) 訳

- 1- 私の言葉が彼の目を泣かせ、疲れさせ、浅い眠りのまま夜を過ごさせた¹⁾。
 2- あたかも彼の目の中に、夜明けから夕方まで胡椒の実が入っているかのようであっ

1) 「彼の目」の「彼」とは詩人のこと。

た²⁾。

- 3- 彼がフワイラ (ハウラ) に思いをとどめることは、ナジュラーンの村々が (二人をへだて) 彼女に会うのを妨げてしまった今となっては、愚かなことである³⁾。
- 4- 私の一族はアルカシーブに住んでおり、彼女の一族はカルブ族の近くに住んでおり、そこが彼女の天地である⁴⁾。
- 5- おお、ハウラよ。自由人で美しく優雅で、部族の中で高貴な血筋の女性を母とする乙女がどれほどいるか、そなたには知るすべがなかろう。
- 6- 私は (このような) 乙女を得て、夜明けまで酒を飲みながら過ごしたが、それは高価な酒であった。
- 7- 私は、南風が吹きすさぶような速さで攻め寄せる、多くの襲撃隊に加わった。その前衛をなす騎馬隊は、意気揚々と進撃したものだ⁵⁾。
- 8- 背筋が丈夫な馬に乗るが、馬は目にたかるハエを目蓋を開けて殺してしまう。馬の四肢は強く、よく伸びるつくりとなっている。
- 9- 雌馬はアルヤマンのシヤラーと呼ばれる布地のように柔軟で、余力を十分蓄えており、戦闘の後の朝、(まだ疲れている) 他の純血種の馬を先導する⁶⁾。
- 10- なぜ、貴女は我らワーイル族の騎士のことを尋ねないのか。まことに、我らは敵に最も早く攻め寄せる勇士であるのだが。
- 11- (人数を計る) 小石が数えられれば、我らが多数であることは明らかだ。我らは優れた騎士を擁し、戦旗の栄光に浴している⁷⁾。

2) 「ずっと涙にくれ、泣き続けていた」の意。

3) 「ナジュラーン」はアルヤマンの肥沃で比較的広大な地域をなす。

4) 「アルカシーブ (al-Kathīb)」はアルバハラインのムハーリブ族の村落。「カルブ (Kalb)」とあるが、この部族はアラビア半島の北端が本拠地で、おそらくナジュラーンに住んでいたバヌー・アルハリス・ブヌ・カアブ (Banū al-Hārith b. Ka'b) の Ka'b を Kalb と誤記したものであろう。

5) nasja l-janūbi 「南風が散り散りに雲をふきよせ、織物のようにするさま」。イムル・アルカイスのムアッラカ2行には「北風と南風が織りなす」という表現がある。

6) アルアンバーリーは「雌ラクダ」のこととしているが、明らかに「雌馬」のこと。siyarā は「絹が混ざったアルヤマン製の織物」で、雌馬の「柔軟き、軽快さ、または肌の柔らかさ」をたとえたもの。

7) 各自が小石を持っていて、名前が呼ばれるとそれを置き、最後に教えて全体の数を確認していたことを物語る。

— (52) アルムラッキシュ・アルアクバル —

المُرْقَشُ الْأَكْبَرُ

まえがき

バクル・ブヌ・ワーイル (Bakr b. Wā'il) 系のバヌー・アーミル・ブヌ・ズフル・ブヌ・サアラバ (Banū ʿĀmir b. Dhuhl b. Thaʿlaba) に属するバヌー・アルワフム一門は、ジュムラーン (Jumrān) でタグリブ族との戦いで敵将ウサーマ・ブヌ・タイム (ʿUsāma b. Taym) を殺し多数の捕虜と多量の戦利品を得た。この一門の指揮者はアルムジャーリド・ブヌ・アッライヤーン (al-Mujālidī b. al-Rayyān) で、詩人もこれに参加していた。詩人はこの断片詩のなかでこの戦闘のことを思いだし語ることによって、バヌー・アルワフム一門を賞賛しているようだ。この戦闘は、6世紀前半、タグリブ族がバスースの戦いで決定的な敗北を喫したキダ (Qida) での戦いの直後行われたものと思われる。ジュムラーン (Jumrān) は上カシーム (Qaṣīm) の地名で本詩8行目の解説ではアッリバーブの土地の水場とある。ムタカーリブ調、8行。

(52) テキスト

وَقَالَ مُرْقَشُ الْأَكْبَرُ أَيْضًا

- | | |
|---|--|
| فَجَلَّتْ أَحَادِيثُهَا عَنْ بَصَرِ | ١- أَتَنَى لِسَانُ بَنِي عَامِرٍ |
| بِجَيْشٍ كَضَوْءِ نُجُومِ السَّحَرِ | ٢- بَأَنَّ بَنِي الْوَحْمِ سَارُوا مَعًا |
| وَكُلَّ كُمَيْتٍ طَوَالَ أَعْرُ | ٣- بِكُلِّ نَسُولِ السُّرَى نَهْدَةٍ |
| بِيَاضِ الْقَوَانِسِ فَوْقَ الْعُرُرِ | ٤- فَمَا شَعَرَ الْحَيِّ حَتَّى رَأَوْا |
| فَأَصْدَرْنَهُمْ قَبْلَ حِينِ الصَّدَرِ | ٥- فَأَقْبَلْنَهُمْ ثُمَّ أَدْبَرْنَهُمْ |
| كَرِيمٍ لَدَى مَرْحَفٍ أَوْ مَكْرٍ | ٦- فَيَا رَبَّ شَلَوْ تَحْطَرَفْنَهُ |
| كَقَشْرِ الْقَتَادَةِ غِبَّ الْمَطَرِ | ٧- وَآخَرَ شَاصٍ تَرَى جِلْدَهُ |
| وَمِنْ رَجُلٍ وَجْهُهُ قَدْ عَفِرَ | ٨- وَكَائِنْ بِجُمْرَانَ مِنْ مُزْعَفٍ |

(52) 訳

- 1- バヌー・アーミルからの知らせが私に伝えられた。この知らせは、私の目に見えなかったものを明らかにした (私の目の曇りを一掃した)。
 2- すなわち、(バヌー・アーミル族の) アルワフム一家は暁の星のように輝く大軍勢を

伴って進攻した。

- 3- すべての者は、夜間でも駿足で駆ける大型の雌馬や、背の高い鼻筋に白い星がある栗毛の牡馬に乗っていた。
- 4- 敵部族は馬の鼻の星の上で輝いているヘルメットの先端を見て、初めて襲撃に気づいた¹⁾。
- 5- 騎馬隊は敵を正面から攻め、次いで背後から攻め、逃げる者は連れ戻し (て殺し) た²⁾。
- 6- なんと多くの切断された貴人らの四肢が、前進したり、反撃したりする戦場に放置されていたことか³⁾。
- 7- その他、なんと多くの目が据わった死体が残されていたことか。その皮膚は、まるでカタダの樹皮が雨のあと膨張しているようであった⁴⁾。
- 8- ジウムラーンには、なんと多くの不意に殺された男たちの亡骸が、埃で顔が覆われたまま捨て置かれていたことか。

1) 「先のとがったヘルメット」はビザンツ形のもつとされる。

2) この行の3個の動詞の主語は *al-khayl* 「軍馬」。目的語の *-hum* は「敵」としてとらえた。*ʾaṣḍara* という動詞は本来、「水を飲ませた動物を連れ戻す」のように「動物」を目的語とするが、ここでは「逃げようとする敵を連れ戻して殺した」と解した。

3) *takhaṭraf-na* は「奪う、踏み越える」などと説明されているが、よく分らない。おそらく「戦場で放置され踏みつけにした」の意であろう。

4) カターダ は「トラガカント (*tragacanth*) ゴムの樹」。棘が多く実がなり、ラクダの飼料となる。その樹皮は雨水で膨れる。*shaṣin* は「膨れたもの、目が据わった、四肢をあげた」など意味が多様で、そのどれか決めがたいが、一応「目が据わった」と解した。

—— (53) アルムラッキシュ・アルアクバル ——

المُرْقَشُ الْأَكْبَرُ

まえがき

これはわずか3行の断片詩である。ジャーヒリーヤ時代の多くの詩人は老いてから、過ぎ去った青春に思いをはせ、青春が今一度よみがえればと、かなわぬ夢を追って嘆いている。この短い詩が本詩集に加えられているのは、このような精神的危機が端的に表現されているためではないだろうか。タウィール調、3行。

(53) テキスト

وَقَالَ مُرْقَشُ الْأَكْبَرُ أَيْضًا

- ١ - هَلْ يَرْجِعُنْ لِي لِمَتِّي إِنْ خَضَبْتُهَا إِلَى عَهْدِهَا قَبْلَ الْمَشِيبِ خَضَابُهَا
 ٢ - رَأَتْ أَفْحُوَانَ الشَّيْبِ فَوْقَ خَطِيطَةٍ إِذَا مُطِرَتْ لَمْ يَسْتَكِنْ صَوَابُهَا
 ٣ - فَإِنْ يُظْعِنِ الشَّيْبُ الشَّبَابَ فَقَدْ تَرَى بِهِ لِمَتِّي لَمْ يُرَمَ عَنْهَا غُرَابُهَا

(53) 訳

- 1- 私がこの髪房を染めたなら、白髪になる前の若い時代に帰してくれるだろうか¹⁾。
- 2- 彼女は頭皮のうえに白髪のカミツレを見た。そこに雨が降ればシラミの卵は身を隠すすべを失う²⁾。
- 3- もし、白髪が青春を旅立たせるのであれば(やむをえない) ことだが、私の髪房からカラスが追放されなかった(頃には、白髪の代わりに) 若々しい黒髪が見られただろうに³⁾。

1) アラブ遊牧民は髪を長い房に編み、2房を前に、残りの2房またはそれ以上を後ろに垂らすのが慣わしであった。

2) 「カミツレ」の花は白く、「白髪」になぞらえている。khaṭīṭa は「雨が降らない土地」で、従って、植物も生えない。これをはげ頭になぞらえ、「はげ頭にはシラミの卵が隠れる場所がない」といつている。

3) bi-hi の接尾代名詞は、al-shayb「白髪」を受けたもので、「白髪の代わりに」の意。また、「カラス」は「黒髪」のたとえである。

— (54) アルムラッキシュ・アルアクバル —

المُرْقَشُ الْأَكْبَرُ

まえがき

この詩は、タグリブ族のムハルヒルにより、アッタグラマイン (al-Taghlamayn、本詩7行ではタグラム Taghlam) という所で殺された詩人の従兄弟サアラバ・ブヌ・アウフ・ブヌ・マーリク (Ṭhaʿlaba b. ʿAwf b. Mālik) を悼んだ哀悼詩とされている。たしかに7-17行はこれにあたる。1-6行は恋人アスマーウの、かつての住まい跡に立って思い出に泣くが、このような序詩のあと死者を哀悼する例はほとんど見られない。18行から最後までは、詩人の母方の叔父にあたる血筋の王家による苛烈な攻撃、自部族の自慢、青春の行く末などに言及しており、序詩、哀悼詩、18行以下は相互に何の関係もない。これら3部分を合せ、一つの詩のように見せかけたものと思われる。

この詩はかなり古い詩とみなされている。第一に、韻律が確立された法則に従っていない。一応サリーウの変調ではあるが、他に例を見ない韻律である。No.49で詩人はサリーウの正調を用いている。本詩の16、18、21、25、29の各行ではきわめて変則的な韻律が用いられている。第二に、本詩には古語が多くあり、解説者らの意見もまちまちで正確な意味が分からないものもある。たとえば、34行の ʿamm、35行の al-ʿaqwarīna などがそれである。第三に、この詩は歴史的な事件に言及しているが、伝承が失われていて、満足な説明がなされていない。7行のタグラムでの会戦はバクル族がタグリブ族に致命的敗北を喫させたキダの戦いより少しまえのことと推定されるが、正確な日時は分からない。なお、キダの戦いはアルバスースの戦いが終わったあとに起こったと推定されている。

以上のような事情から、この詩は6世紀前半の作とみなされる。定型詩の慣行は既に確立されていたはずで、19-21行はその証拠となる。サリーウ調、35行。

(54) テキスト

وَقَالَ مُرْقَشُ الْأَكْبَرُ أَيْضًا

- | | |
|-------------------------------------|---|
| لَوْ كَانَ رَسْمٌ نَاطِقًا كَلَّمْ | ١- هَلْ بِالْدِّيَارِ أَنْ تُجِيبَ صَمَمْ |
| رَقَشَ فِي ظَهْرِ الْأَدِيمِ فَلَمْ | ٢- الدَّارُ فَقَرَّ وَالرُّسُومُ كَمَا |
| قَلْبِي فَعَيْنِي مَاؤُهَا يَسْجُمْ | ٣- دِيَارُ أَسْمَاءَ الَّتِي تَبَلَتْ |
| نَوَّرَ فِيهَا زَهْوُهُ فَأَعْتَمَّ | ٤- أَضَحَتْ خَلَاءٌ نَبَتْهَا ثَيْدُ |

- ٥- بَلْ هَلْ شَجَّنَكَ الظُّعُنُ بَاكِرَةً
 ٦- النَّشْرُ مِسْكٌ وَالْوُجُوهُ دَنَّا
 ٧- لَمْ يُشْجِرْ قَلْبِي مِلْحَوَاتٍ إِنْ
 ٨- تَعَلَّبُ ضَرَّابُ الْقَوَانِسِ بِالِ
 ٩- فَاذْهَبْ فِدَى لَكَ ابْنُ عَمِّكَ لَا
 ١٠- لَوْ كَانَ حَتَّى نَاجِيًا لَنَجَا
 ١١- فِي بَاذِخَاتٍ مِنْ عَمَايَةِ أَوْ
 ١٢- مِنْ دُونِهِ بَيْضُ الْأُنُوقِ وَقَوْ
 ١٣- يَرْقَاهُ حَيْثُ شَاءَ مِنْهُ وَإِ
 ١٤- فَعَالَهُ رَيْبُ الْحَوَادِثِ حِ
 ١٥- لَيْسَ عَلَى طُولِ الْحَيَاةِ نَدَمٌ
 ١٦- يَهْلِكُ وَالِدٌ وَيُخْلَفُ مَوْ
 ١٧- وَالْوَالِدَاتُ يَسْتَفِدْنَ غِنَى
 ١٨- مَا ذُنُبَنَا فِي أَنْ غَزَا مَلِكٌ
 ١٩- مُقْسَابِلٌ بَيْنَ الْعَوَاتِكِ وَالِ
 ٢٠- حَارَبَ وَاسْتَعْوَى قَرَاظِبَةً
 ٢١- بَيْضٌ مَصَّالِيَتْ وَجُوهُهُمْ
 ٢٢- فَاَنْقَضَ مِثْلَ الصَّقْرِ يَقْدُمُهُ
 ٢٣- إِنْ يَعْضِبُوا يَعْضِبُ لِدَاكَ كَمَا
 ٢٤- فَنَحْنُ أَحْوَالُكَ عَمْرُكَ وَالِ
 ٢٥- لَسْنَا كَأَقْوَامٍ مَطَاعِمُهُمْ
 ٢٦- إِنْ يُخْصِبُوا يَعَيُوا بِخَصْبِهِمْ
 ٢٧- عَامٌ تَرَى الطَّيْرَ دَوَاخِلَ فِي
 ٢٨- وَيَخْرُجُ الدُّخَانُ مِنْ خَلَلِ الِ
 ٢٩- حَتَّى إِذَا مَا الْأَرْضُ رَيَّنَهَا الِ
 ٣٠- ذَاقُوا نَدَامَةً فَلَوْ أَكَلُوا الِ
 ٣١- لَكِنَّا قَوْمٌ أَهَابَ بِنَا
 ٣٢- أَمْوَالُنَا نَقَى النُّفُوسَ بِهَا
 كَأَنَّهُنَّ النَّخْلُ مِنْ مَلْهَمٍ
 نِيرٌ وَأَطْرَافُ الْبَنَانِ عَنَمٌ
 لَا صَاحِبِي الْمَتْرُوكِ فِي تَعْلَمِ
 سَيِّفٍ وَهَادِي الْقَوْمِ إِذْ أَظْلَمَ
 يَخْلُدُ إِلَّا شِشَابَةً وَأَدَمَ
 مِنْ يَوْمِهِ الْمُزَلَّمِ الْأَعْصَمِ
 يَرْفَعُهُ دُونَ السَّمَاءِ خِيَمِ
 قَهُ طَوِيلُ الْمُنْكَبِينَ أَشَمٌ
 مَا تُنْسِيهِ مَيِّتَةٌ يَهْرَمُ
 تَتَّى زَلَّ عَنْ أَرْيَادِهِ فَحُطِمَ
 وَمِنْ وَرَاءِ الْمَرْءِ مَا يَعْلَمُ
 لُودٌ وَكُلُّ ذِي أَبِي يَيْتَمٌ
 ثُمَّ عَلَى الْمِقْدَارِ مَنْ يَعْقَمُ
 مِنْ آلٍ جَفَنَةٌ حَارِمٌ مُرْغَمٌ
 غُلْفٍ لَا نِكْسٌ وَلَا تَوَوءَمُ
 لَيْسَ لَهُمْ مِمَّا يُحَارُ نَعَمٌ
 لَيْسَتْ مِيَاهُ بِحَارِهِمْ بَعُومٌ
 جَيْشٌ كَعْلَانِ الشُّرَيْفِ لَهُمْ
 يَنْسَلُ مِنْ خِرَشَائِهِ الْأَرْقَمُ
 خَالٌ لَهُ مَعَاظِمٌ وَحُرْمٌ
 كَسِبُ الْخَنَا وَنَهَكَةُ الْمَحْرَمِ
 أَوْ يُجْدِبُوا فَهُمْ بِهِ أَلَامٌ
 بُيُوتٍ قَوْمٍ مَعَهُمْ تَرْتَمُ
 سِتْرٌ كَلَوْنِ الْكُودَنِ الْأَصْحَمِ
 نَبْتُ وَجَنِّ رَوْضَهَا وَأَكَمُ
 حُطَبَانٍ لَمْ يُوجَدَ لَهُ عَلَقَمُ
 فِي قَوْمِنَا عَقَافَةٌ وَكَرَمُ
 مِنْ كُلِّ مَا يُدْنِي إِلَيْهِ الذَّمُ

٣٣- لَا يُبْعِدُ اللَّهُ التَّلَبُّبَ وَالْ
 ٣٤- وَالْعَدُوَّ بَيْنَ الْمَجْلِسَيْنِ إِذَا
 ٣٥- يَأْتِي الشَّبَابُ الْأَفْوَورِينَ وَلَا
 غَارَاتٍ إِذْ قَالَ الْحَمِيسُ نَعَمْ
 وَلَى الْعَشِيِّ وَقَدْ تَنَادَى الْعَمَّ
 تَغِطُّ أَخَاكَ أَنْ يُقَالَ حَكَمَ

(54) 訳

- 1- 住居 (跡) が、返事をしないとは耳が聞こえないためか? 万一、廃墟がものを言えるのであれば多くを語るであろうに。
- 2- 住まいは荒れ果て、跡形は皮の表を筆が文字で飾ったようだ¹⁾。
- 3- これは私の心を恋病で打ちのめした、アスマーウが住んでいたテントの跡だ。私の目から大粒の涙が流れた。
- 4- そこには人影は絶え、草木は露にぬれて生い茂り、さまざまな色合いの花を咲かせている。
- 5- 否、お前を悲しませたのは、早朝出立したラクダの背にある婦人用の輿か。彼女らの輿はまるで、マルハムのナツメヤシの樹のようであった²⁾。
- 6- (彼女らのあたりには) 麝香の香りが漂い、彼女らの顔は金貨のように輝き、指先はアナムの樹のように紅色であった³⁾。
- 7- タグラムの地で殺され、放置されていた私の友 (従兄弟) ほど、私の心を嘆かせた事件はなかった⁴⁾。
- 8- 彼はすなわち、サアラブ。剣で敵のヘルメットの頂を打ち砕き、闇の中ではわが部族を導いた男よ⁵⁾。
- 9- されば逝き給え、君の従兄弟 (である私が) 君の身代わりになりたいものよ。シャールバ山とアダム山を除いて生きながらえるものはない⁶⁾。
- 10- 生あるものが運命の日から逃れ得るなら、軽快な前脚に白い筋のある野生のヤギもそれから逃げるであろう⁷⁾。
- 11- 高くそびえるアマーヤの嶺のなかで、あるいはヒヤム山がヤギを天の近くまで運び上げるであろう。
- 12- ヤギの下には白ハゲタカの卵があり、上の方には両肩を持ち上げたような山頂があったりを見下ろしている。

1) テントの跡が風に吹かれて荒らされ、地面に文様を残している有様を raqqasha「飾る」という動詞で表現しており、ここから詩人の綽名が muraqqish「飾り家」とつけられたと言われている。
 2) 「マルハム (Malham)」はアルヤマーマまたはバハラインの地名で、ナツメヤシの樹が多かった。
 3) 「アナム(°Anam)」は赤い実をつける。ヒンナーウ (hinnā°) で染めた指先をこれに比している。
 4) 「タグラム (Taghlam)」は「まえがき」参照。[校正者注: mi-l-hawādithi = min al-hawādithi]
 5) Tha°lab は Tha°laba の省略形。詩人の従兄弟サアラバ・ブヌ・アウフ・ブヌ・マーリク (Tha°laba b. °Awf b. Mālik)、別名アルフシャム (al-Khushām) のことで、詩人の恋人アスマーウ (°Asmā°) の兄弟。
 6) 「シャールバ (Shāba)」と「アダム (°Adam)」, または「アラム (°Aram)、イラム(°Iram)」。これらはいずれも、山または丘の名。人の命は限りがあるのに対して、これらの山はいつまでも残る、と言ったもの。ここで「そなたの従兄弟」とは詩人のこと。詩人は従兄弟のために命をかけて復讐すると述べている。
 7) al-muzallam < zalam「占い矢」。矢のように細くしなやかで、軽快な脚をしたヤギのこと。

- 13- ヤギはそこを思いのまま登る。運命がヤギの死を延期すれば、歳を重ねて老いる。
- 14- だが、やがて運命の転変はヤギを死に追いやるであろう。すなわち、山の突出部から滑り落ち粉々になってしまうだろう。
- 15- 長い人生をやり過ごした(者)には、後悔するいわれはない。彼の前にはよく承知している(老弱病苦が)待ち構えている。
- 16- 父は死に、子が跡を継ぐ。父を持つ者はいつの日か孤児になる。
- 17- 母たちは多くの子供を得るが、しかるべき時に生まず女になる⁸⁾。
- 18- ジャフナ家の決然とした、敵を苦しめる王が攻撃してきたが、一体、我々に何の咎があつてのことか。
- 19- アルアワーティクとアルグッラーフの血筋の貴人で、弱虫でもなく、(他より劣る)双子でもない(王だ)⁹⁾。
- 20- 彼は戦い、自らのラクダを持たない、流浪している泥棒集団に支援を求めた¹⁰⁾。
- 21- 彼らの顔は白く、力がみなぎり、彼らの池の水は豊かで地面にしみて消えることはない¹¹⁾。
- 22- 彼は隼のような速さで突進し、その前をアッシュライフ山の樹木が密集している溪谷のように、あらゆるものを飲み込む軍勢が進撃した¹²⁾。
- 23- 彼らが激怒すれば、それにつれて彼も激怒する。まるで、斑紋を帯びた毒蛇が皮から抜け出したようである。
- 24- 我らは貴殿の母方の叔父にあたる。貴殿の命に賭けて誓う。母方の叔父には忠誠を誓いその名誉を守らねばならぬと¹³⁾。
- 25- 我らは、他人を中傷し秘事を暴いて名誉を汚し、それによって日々の糧を稼いでいるような者たちとは異なる。
- 26- 彼らは豊作に恵まれてもそれを活用することが出来ず、不作に見舞われると卑劣な本

8) 15、16、17行の3行は35行の前に配置すべきもの。warāʾ が ʾamām 「前、行く末」の意味で用いられている。

9) 18行に「ジャフナ (Jafna) 家」とあり、19行に「アワーティク(al-ʿAwātik)」と「アルグッラーフ(al-Ghullāf)」とあるが、明らかに間違いである。ジャフナ家はガッサーンの王家であり、アワーティク、グッラーフはいずれもキンダ王家ゆかりの者だからである。従って、「ジャフナ」は「キンダ」とすべきもの。また、18行では ghazā 「侵略する」の目的語がなく、王が誰を攻め、詩人が誰に対して言い訳をしているのか不明である。「アワーティク (ʿAwātik, 単数 ʿĀtik)」はキンダ王家の女性3名 (ʿĀtika bint Hilāl b. Fālij, ʿĀtika bint Murra b. Hilāl, および ʿĀtika bint al-ʿAwqas b. Murra)。グッラーフ (Ghullāf) とは、イムル・アルカイスの伯父2名ガルファウ (Ghālfāʾ) とサラマ (Salama) をさす。これらから推定される王とは、ラフム朝のアルムンジルまたはアムル王であろう。両者とも詩人と同時代の人。アルハーリス・ブヌ・ヒッリザのムアッラカ70-75行には、キンダのカイス・ブヌ・マーディーカルブ (Qays b. Maʿdīkarb) がヒーラ王のラクダを襲った一件が語られており、これに類する戦いのことと思われる。「双子は弱体」とされていた件については、アンタラのムアッラカ58行でも指摘されている。

10) qarāḍiba (単数 qirdāb) とは、他人のものを略奪して生計を立てている流浪の泥棒集団。

11) 下の句は1シラブル多い。また、この部分の意味は判然としない。

12) 「アッシュライフ (al-Shurayf)」と「アッシュアラフ (al-Sharaf)」はネジュドの山で、アッタスリール (al-tasrīr) という樹が繁茂した溪谷を挟んでいる。

13) 王の母方の叔父とは、ヒーラのアルムンジル三世の母またはその祖先が、バクル族であることを暗示している。この王は「マーイ・アッサマーウ (Māʾ al-Samāʾ 天の水)」とか「イブン・シャキーク (Ibn Shaqīqa 血を分けた女性の子)」などとも呼ばれている。同じバクル族の詩人アルハーリス・ブヌ・ヒッリザもムアッラカ84行でアムル・ブヌ・ヒンド王に母方の血縁関係ありと訴えており、前記の暗示が正しい可能性がある。

性を現す。

- 27- (飢饉の) 年には、鳥が人々のテントの中に入り彼らとともに餌をついばむのをあなたは見るであろう。
- 28- そして、帳の隙間から、駄馬のような褐色の煙が出てくる¹⁴⁾。
- 29- だが、やがて大地は青草で飾られ、草原が色濃くなり、薔薇が満ちるようになると、
- 30- 彼らは後悔を味わった。たとえ、彼らはコロシントを食べても、そのひどい苦味に気づかなかったであろう¹⁵⁾。
- 31- しかし、我らは、我が部族の中で高潔さと高貴さが声高に呼びかける一門である¹⁶⁾。
- 32- 我々は我らの財産でもって、非難を寄せるすべてのものから我らの命を守る¹⁷⁾。
- 33- 軍勢が「あつ、ラクダがいる」と叫ぶとき、願わくは神が、剣で武装し略奪戦を挑むのを除去し給いませんように¹⁸⁾。
- 34- (召使たちは) 日が暮れると (来客をもてなすために) 二つの宴席の間を駆け回り、多くの人々が席に着く。
- 35- 青春はやがて衰えるものだ。よって、人々から「(長生きして) 賢明なお人だ」と言われているそなたの兄弟を妬むな¹⁹⁾。

14) 飢饉のときには、女たちは食べ物があることを悟られないように、テントの中で、ラクダの糞を燃やして密かに料理をしていた様子を物語る。

15) 解説では「彼らの胸中には敵意がありコロシントを食べても苦味を感じない」とあるが、どのような状況で敵意を抱くようになったのか不明である。

16) *ahāba bi* は「ラクダなど動物に大声で声をかける」の意味に用いられるが、ここでは「人間に呼びかける」のに用いられている。タラファのムアッラカ15行に *ṣawti l-muhībi* 「ラクダに呼びかける者の声」という表現がある。

17) *yudnā ilay-hi* の部分は、アブー・ジャッファルの伝える *yudnī ilay-hā* によって訳した。すなわち、「命に (非難) が寄せるすべてのもの (非難) から、財産をつぎ込んで命を守る」。

18) ここでいう「ラクダ」は、略奪をする側が見つけたそれをさす。

19) *al-ʿaqwarūna* は *al-dawāhī* 「災難」と説明されている。つまり、「青春が災難に行き着く」とは「老化や病気で衰える」の意味であろう。この1行は詩人の甥アムル・ブヌ・カミーア (ʿAmr b. Qamīʿa) の次の詩と軌を一にしている。(Ḥamāsa 詩集より)

lā taghbiṭ-i l-marʾa ʿan yuqāla la-hu ʿamsā fulānun li-ʿumri-hi ḥakamā

ʿin sarra-hu tūlu ʿumri-hi fa-la-qad ʿaḏḥā ʿala l-wajhi tūlu mā salimā

某は長生きして賢者になった、と言われる男を妬むな
長命が彼を喜ばせているとしても、長い人生を無事に
送ってきた印が貴殿の顔にも表れているのだから

— (55) アルムラッキシュ・アルアスガル —

المُرْقِشُ الْأَصْغَرُ

まえがき

本名はラビーア・ブヌ・スフヤーン・ブヌ・サアド (Rabī'a b. Sufyān b. Sa'd) とあるが、カイロ版ではアムル・ブヌ・ハルマラ・ブヌ・サアド・ブヌ・マーリク (°Amr b. Ḥarmala b. Sa'd b. Mālik) が妥当だとしている。その論拠として、彼はアルムラッキシュ・アルアクバルの甥であるとともに、ムアッラカ詩人タラファの父方の伯父であり、タラファの名は、タラファ・ブヌ・アルアブド・ブヌ・スフヤーン・ブヌ・サアド・ブヌ・マーリク (Ṭarafa b. al-°Abd b. Sufyān b. Sa'd b. Mālik) であるためだ、としている。これは No.45の血統図とは異なることになる。この詩人は伯父のアルムラッキシュ・アルアクバルよりもすぐれていると評価されており、彼より長命であった、と言われている。

彼は前者とともにアルバスースの戦いに参加し、同様に恋物語 (No.56「まえがき」参照) の主人公にされている。相手の女性はファーティマ (Fāṭima)、すなわち、アルヒーラのアムンジル三世の娘で、ペルシャ湾頭のカージマ (Kāzima) 近くの搭(宮殿)で暮らし、父王の兵らにより監視されていた。しかし、この詩だけで、恋物語の詳細を知ることはできない。本詩集 No.56, 2行目では彼女は詩人の部族(バクル)の娘とあり、王女とはなっていない。また、No.55および No.57では、相手の女性がビント・アジュラーン (Bint °Ajlān) となっているが、彼女は恋物語では詩人と王子の橋渡し役を果たした侍女となっている。この詩の1-11行はビント・アジュラーンへの賛辞、12-19行は馬の描写、タウィール調、19行。

(55) テキスト

وَقَالَ الْمُرْقِشُ الْأَصْغَرُ

- | | |
|--|---|
| غَدَا مِنْ مُقَامٍ أَهْلُهُ وَتَرَوُّحُوا | ١- أَمِنْ رَسْمٍ دَارٍ مَاءٍ عَيْنَيْكَ يَسْفَحُ |
| جَاذَرُهَا بِالْجَوْرِ وَرَدَّ وَأَصْبَحُ | ٢- تُزَجِّي بِهَا حُنْسُ الظِّبَاءِ سَخَالَهَا |
| أَلَمَّ وَرَحَلَى سَاقِطٌ مُتَزَحِرُحُ | ٣- أَمِنْ بِنْتِ عَجَلَانَ الْخَيْالِ الْمُطْرَحُ |
| إِذَا هُوَ رَحَلَى وَالْبِلَادُ تَوْضَحُ | ٤- فَلَمَّا انْتَبَهَتْ بِالْخَيْالِ وَرَاعَنِى |
| وَيُحَدِّثُ أَشْجَانًا بِقَلْبِكَ تَجْرَحُ | ٥- وَلَكِنَّهُ زَوْرٌ يُيَقِّظُ نَائِمًا |
| فَلَوْ أَنَّهَا إِذْ تُدْلِجُ اللَّيْلَ تُصْبِحُ | ٦- بِكُلِّ مَبِيتٍ يَغْتَرِبُنَا وَمَنْزِلٍ |

- ٧- فَوَلَّتْ وَفَدَ بَثَّتْ تَبَارِيحَ مَا تَرَى
 ٨- وَمَا قَهْوَةٌ صَهْبَاءُ كَالْمِسْكِ رِيحُهَا
 ٩- ثَوْتُ فِي سِبَاءِ الدِّ عِشْرِينَ حِجَّةً
 ١٠- سَبَاهَا رِجَالٌ مِنْ يَهُودَ تَبَاعَدُوا
 ١١- بِأَطْيَبٍ مِنْ فِيهَا إِذَا حِثُّ طَارِقًا
 ١٢- غَدُونَا بِصَافٍ كَالْعَسِيبِ مُجَلَّلٍ
 ١٣- أَسِيلٌ نَبِيلٌ لَيْسَ فِيهِ مَعَابَةٌ
 ١٤- عَلَى مِثْلِهِ آتَى النَّدَى مُخَايَلًا
 ١٥- وَيَسْبِقُ مَطْرُودًا وَيَلْحَقُ طَارِدًا
 ١٦- تَرَاهُ بِشِكَاكِ الْمُدَجَّجِ بَعْدَ مَا
 ١٧- شَهِدْتُ بِهِ فِي غَارَةٍ مُسَبَّطَةٍ
 ١٨- كَمَا انْتَفَجَتْ مِنَ الطَّبَائِ جَدَايَةٌ
 ١٩- يَجْمُ جُمُومَ الْحِسِيِّ جَاشَ مَضِيقُهُ
- وَوَجَدِي بِهَا إِذْ تَحْدُرُ الدَّمْعُ أَبْرَحُ
 تُعَلَّى عَلَى النَّاجُودِ طَوْرًا وَتُقَدِّحُ
 يُطَانُ عَلَيْهَا قَرْمَدٌ وَتُرَوِّحُ
 لِحِيلَانِ يُدْنِيهَا مِنَ السُّوقِ مُرْبِحُ
 مِنَ اللَّيْلِ بَلْ فُوهَا أَلَدُّ وَأَنْصَحُ
 طَوْنَاهُ حِينًا فَهُوَ شَزْبٌ مُلَوِّحُ
 كُمَيْتٌ كَلَوْنِ الصَّرْفِ أَرْجَلُ أَقْرَحُ
 وَأَعْمُرُ سِرًّا أَيْ أَمْرِي أَرْبَحُ
 وَيَخْرُجُ مِنْ غَمِّ الْمَضِيقِ وَيَجْرَحُ
 تَقْطَعُ أَفْرَانُ الْمُغِيرَةِ يَجْمَحُ
 يُطَاعِنُ أَوْلَاهَا فَمَامٌ مُصَبَّحُ
 أَشْهُمٌ إِذَا ذَكَرْتَهُ الشَّدُّ أَفِيحُ
 وَجَرَدَهُ مِنْ تَحْتِ غَيْلٍ وَأَبْطَحُ

(55) 訳

- 1- お前の両目から涙が流れるのは、今や人影が絶えた廃墟の故か。かつてここに住んでいた一家は（ある日）早朝に出立して、旅立ってしまった。
- 2- 廃墟となった土地では、短平な鼻のカモシカが子らをゆつくりと伴い草を食べさせていた。また、窪地にいるその仔らはバラ色か、一層赤味を帯びているように見えた。
- 3- 遠くから投げ出され（私のもとを）夜の宿としたのはビント・アジュラーンの幻か。私の鞍は、休んだとき少し離れたところに置かれていた。
- 4- 私はその幻に気づいて目覚め恐れたが、見よ、それは私の鞍にすぎず、大地は空漠と広がっていた。
- 5- だが、幻は眠っている男を目覚めさず訪問者であり、お前の心を悲しませ、傷つける。
- 6- 彼女の幻は我らのすべての野営地を夜間におとずれ（て眠りを妨げ）る。願わくは、彼女の幻が夜訪れ、朝まで（我らと）ともにいてくれればよいのだが。
- 7- だが、彼女の幻はご覧のとおり苦悩を振りまいたまま、立ち去ってしまった。幻が涙をほとばせたとき、私の熱い思いは頂点に達した。
- 8- 赤いブドウ酒の香りは、麝香のそれとは異なる。それは（栓が抜かれると）まず濾過器に入れ、つぎに、椀で汲み取られる¹⁾。
- 9- ブドウ酒は土器のなかで20年間仕込まれるが、土器の栓には泥が塗られ、風にさら

1) qahwa が「ブドウ酒」の意味で使われている。「ブドウ酒に沈溺すると食が進まない (tuqhī °an-i t-tā°ām) から、qahwa と言われるようになった」と、アルアスマイーは説明している。

されていた²⁾。

- 10– 遠く離れたジーラーンのユダヤ教徒の男たちがそのブドウ酒を買い、これで稼ごうとする者が市場に運んできた³⁾。
- 11– 私が夜訪れる時には、彼女の口は（このブドウ酒よりも）美味である。否、彼女の口のほうが一層甘味で清らかである⁴⁾。
- 12– 早朝、我らは肌が清らかで、ナツメヤシの枝のように引き締まった馬に衣を着せて狩に出かけた。それは贅肉を落とし、鍛えあげた細身の馬であった⁵⁾。
- 13– 馬の顔は（毛が短く）滑らかで気品があり、非難すべき欠点はない。スィルフ（で染めた赤味を帯びたような）栗毛で、3本の脚には白い環があり、額には銀貨のような星がついている⁶⁾。
- 14– 私は意気揚々とこのような馬に乗って長老らの議論の席に加わり、進退いずれが有利か、ひそかに目配せしたものだ。
- 15– この馬は、追われると全速力で相手を振り切って逃げきり、追うとなればたやすく追いつく。困難な境遇から抜け出すすべを知り、獲物をよく捉える。
- 16– ご覧のとおり、馬は完全武装した騎士を乗せて略奪戦に加わり、味方の馬が疲れきっているときでも、抑えがたい余力を残し、（活発に動く）。
- 17– 私は長く伸びた襲撃隊のなかで、この馬に乗っていた。朝方、襲撃を受けた相手集団が襲撃隊の先頭の兵らと槍で突き合いを始めた。
- 18– すると、この馬はまるで（隠れ処から）怒り狂って飛び出したカモシカのように、突進した。馬は背が高く、急行するよう指示すると、これに答えて大またで飛び出した。
- 19– 馬は、大量の地下水と小石の上にかぶさった砂利の隙間から水が噴き出すような勢いで走る⁷⁾。

-
- 2) ブドウ酒を仕込んだ土器は、熟成を早めるため酒屋の屋上で天日に晒されるようにしていた。
 - 3) テキストでは「ジーラーン (Jilān)」となっている。これはイランのカスピ海近辺の地名で、ここからアラビア半島にブドウ酒を運ぶには遠すぎるように思われる。ヨルダンのジャウラーン (Jawlān) 高原の東側からではないか。このあたりではユダヤ教徒が酒を商っていた。イラクではペルシャ人やアルメニア人がこれを扱っていた。
 - 4) [校正者注: あるいは、「彼女の口より美味なもの（ブドウ酒）を携え、私が夜に訪れる時もあったが、否、彼女の口のほうが一層甘味で清らかである。」との理解も可能と思われる。]
 - 5) °Abū Faq̣as という人物は、「優れた馬とは3箇所が幅広く、3箇所が長く、3箇所が短く、3箇所が鋭く、3箇所が清らかで、3箇所が大きく開いている。すなわち、額、胸の上部、尻が幅広く、胴、首、上腕が長く、背、尾骨、後ろ足のすね (sāq) が短く、心臓、耳、肩が鋭く、肌、目、いななきが清らかであり、鼻腔、わき腹、顎が大きく広い」という基準をあげている。
 - 6) širf「赤色染料」No.3, 5行、No.6, 8行で既に登場している。また、No.3, 4行にもあったが、脚の3本に白い環があるのは駿馬の印で、°aqrah は馬の額にある小型の星、大型の星は ghurra と言われた。
 - 7) 馬の駿足を奔流に比する例は No.22, 9行にある。地下水の上に堆積した砂利 hisy は普段は水を抑えているが、地下の岩盤との間に溜まっている水も大雨などが降ると突然、泉となって噴き出す。「噴出口」を maḍīq としており、噴き出す水の勢いが強いことを表している。なお、hisy の複数形 al-°Ahsā 与 al-Ḥasā はクウェートからカタールを経てオマーンにまたがるペルシャ湾岸の奥地を表す地名でもある。

—— (56) アルムラッキシュ・アルアスガル ——

المُرْقَش الأصغر

まえがき

Lyall 校訂テキスト pp.498-499、および『歌の書』5, pp.193-194には、この詩を詠んだ背景に概略次のような恋物語があったとしている。

ラフム朝のアルムンジル三世の姫ファーティマはペルシャ湾頭のカージマの塔(宮殿)に住んでおり、ヒンド・ Bint・ アジュラーン (Hind bint °Ajlān) という奴隷娘が仕えていた。宮殿は父王の命令で見張りの兵らが、着衣のすそをひきずって歩き、誰かがここに入ろうとしても、地面の足跡ですぐ分かるようにしていた。ただ、侍女のヒンド・ Bint・ アジュラーンだけは、出入りが許されていた。侍女は毎夕、近くの水場に出かけ、気に入った男を連れ帰り、自分のところに泊めていた。

ところで、詩人にはアムル・ブヌ・ジャナーブ・ブヌ・アウフ (°Amr b. Janāb b. °Awf) という友人がいた。(一説では、大ムラッキシュの兄弟で詩人の伯父にあたるアムル・ブヌ・ハルマラ・ブヌ・サアド °Amr b. Ḥarmala b. Sa'd b. Mālik のこととある)。このアムルと詩人は瓜二つの美男であったが、アムルの体毛のほうが濃かった。ある日のこと、アムルが詩人に、侍女が毎夕、水場のところから気に入った男を連れ帰り泊めている、と教えた。詩人は、ラクダを放置して、水場に出かけた。姫が宮殿から見下ろして人々を眺めていると、侍女が詩人を連れ帰った。

翌朝、侍女が姫の前に伺候すると、姫は、「そなたの股間にあるのは何か。」と尋ねた。侍女が、「わら屑みたいなしみです。ある男が昨夜私のところに泊まりました。」と答えた。(「赤くはれていた」との言い伝えもあり、これが「わら屑のようなしみ」より妥当と思われる。) 姫は侍女の股間についているしみの正体に気づき、聞いただと、侍女は、「知らない美男の仕業です。」と答えた。姫は、「明日になったら、香炉を持ってその男のところに行き、その上に座るよう言いつけなさい。また、歯ブラシを与えなさい。もし、彼がそれで歯を磨くか、つき返すようであれば、つまらない男です。香炉のうえに座るか、つき返すようであれば、やはり、つまらない男です。」と言いつけた。

侍女は翌日になると、香炉と歯ブラシを持って出かけ、詩人に、「この上に座ってください。」という、詩人はこれを拒んで、「こちらに寄せてくれ。」といい、顎鬚と豊かな頭髮に香を吹き込めた。歯ブラシについては、先端を切って歯を磨いた。侍女は引き返して、姫に男のなishōを報告した。これを聞いた姫はすっかり感心して、「その男を連れてきなさい。」と言いつけた。侍女は足跡が残らないように詩人を背負って宮殿に運び、姫に会わせた。姫は一目で詩人に惚れ込み、しばらくの間、侍女の手引きで逢瀬を楽しんだ。

一方、父王は姫の宮殿に他人が入り込まないようにと番兵を送り、加えて、カー

イフ (qā'if, 足跡を見てその正体を推測する者) も派遣して検分させた。その結果、足跡は、重荷を持った侍女のものしか見つからず、二人のことは露見しなかった。ところが、詩人と瓜二つの友人アムルが、詩人が姫のところに通っているのに気づき、「互いに隠し事をしない、と誓った仲ではないか、このままではお前と話もしたくない。もとの関係によりを戻すためには、お前の替え玉になって私を姫に会わせよ。」とせまった。詩人はついに押し切られ、宮殿に侍女の工夫で露見せず入っていたことを、こまごまと教え、彼を侍女にゆだねた。侍女は首尾よくアムルを姫の部屋に運び入れた。だが、姫は事に及んで、アムルの股間の毛が詩人のそれより濃いのに気づき、アムルを押しやり、侍女を呼んで、宮殿から放逐した。詩人は替え玉工作に失敗し、姫との信頼関係を損ねたことを恥じて、親指を噛み切って悔いたとのことである。

この詩の数行には、この恋物語と関係がありそうな記述が散見されるが、明白に一貫した筋を把握するのは困難である。むしろ、複数の詩の断片を集めたものと見なすべきもののように思われる。タウィール調、24行。

(56) テキスト

وَقَالَ الْمُرْقِشُ الْأَصْغَرُ أَيْضًا

- ١- أَلَا يَا اسْلَمَى لَا صُرْمَ لِي الْيَوْمَ فَاطِمَا
- ٢- رَمَتْكَ ابْنَةُ الْبَكْرِىِّ عَنْ فَرْعِ ضَالَةٍ
- ٣- تَرَاءَتْ لَنَا يَوْمَ الرَّحِيلِ بِوَارِدٍ
- ٤- سَقَاهُ حَبِىُّ الْمُزْنِ فِي مُتَهَلِّلٍ
- ٥- أَرْنَتْكَ بِذَاتِ الضَّالِّ مِنْهَا مَعَاصِمَا
- ٦- صَحَا قَلْبُهُ عَنْهَا عَلَى أَنَّ ذِكْرَهُ
- ٧- تَبَصَّرَ خَلِيلِي هَلْ تَرَى مِنْ ظَعَائِنِ
- ٨- تَحْمَلْنَ مِنْ جَوِّ الْوَرِيْعَةِ بَعْدَ مَا
- ٩- تَحْلَيْنَ يَاقُوتَا وَشَدْرًا وَصِيْعَةً
- ١٠- سَلَكَنَ الْفُرَى وَالْجِرْعَ تُحْدَى جِمَالَهُمْ
- ١١- أَلَا حَبْدًا وَجْهَ ثُرَيْنَا بِيَاضِهِ
- ١٢- وَإِنِّي لَأَسْتَحْيِي فُطَيْمَةً جَائِعًا
- ١٣- وَإِنِّي لَأَسْتَحْيِيكَ وَالْحَرْقُ بَيْنَنَا
- وَلَا أَبَدًا مَآ دَامَ وَصْلُكَ دَائِمًا
- وَهُنَّ بِنَا حُوصٌ يُخْلَنُ نَعَائِمًا
- وَعَذِبِ الثَّنَايَا لَمْ يَكُنْ مُتْرَاكِمَا
- مِنَ الشَّمْسِ رَوَاهُ رَبَابًا سَوَاجِمَا
- وَحَدًّا أَسِيْلًا كَالْوَذِيلَةِ نَسَاعِمَا
- إِذَا خَطَرَتْ دَارَتْ بِهِ الْأَرْضُ قَائِمًا
- خَرَجْنَ سِرَاعًا وَافْتَعَدْنَ الْمَفَائِمَا
- تَعَالَى النَّهَارُ وَاجْتَزَعْنَ الصَّرَائِمَا
- وَجَزَعًا ظَفَارِيًّا وَدُرًّا تَوَائِمَا
- وَوَرَّكْنَ قَوًّا وَاجْتَزَعْنَ الْمَخَارِمَا
- وَمُنْسَدِلَاتٍ كَالْمَتْنَانِي فَوَاحِمَا
- خَمِيصًا وَأَسْتَحْيِي فُطَيْمَةً طَاعِمَا
- مَحَافَةً أَنْ تَلْقَى أَحًّا لِي صَارِمَا

- ١٤- وَإِنِّي وَإِنْ كَلَّتْ فَلُوصِي لَرَايِمِ
 ١٥- أَفَاطِمُ إِنَّ الْحُبَّ يَعْقُو عَنِ الْقَلِي
 ١٦- أَلَا يَا اسْلَمِي بِالْكُوكِبِ الطَّلَقِ فَاطِمَا
 ١٧- أَلَا يَا اسْلَمِي ثُمَّ اعْلَمِي أَنَّ حَاجَتِي
 ١٨- أَفَاطِمُ لَوْ أَنَّ النِّسَاءَ بِبَلَدَةٍ
 ١٩- مَتَى مَا يَشَأْ ذُو الْوَدِّ يَصْرِمُ خَلِيلُهُ
 ٢٠- وَآلِي جَنَابٍ حِلْفُهُ فَطَاعَتُهُ
 ٢١- كَأَنَّ عَلَيْهِ تَنَاجٍ آلٍ مُحَرِّقٍ
 ٢٢- فَمَنْ يَلْقَ خَيْرًا يَحْمَدِ النَّاسُ أَمْرَهُ
 ٢٣- أَلَمْ تَرَ أَنَّ الْمَرْءَ يَجْذِمُ كَفَّهُ
 ٢٤- أَمِنْ حُلْمٍ أَصْبَحْتَ تَنْكُتُ وَاجِمَا
- بِهَا وَبَنَفْسِي يَا فُطَيْمَ الْمَرَايِمَا
 وَيُجْشِمُ ذَا الْعَرَضِ الْكَرِيمَ الْمَجَاشِمَا
 وَإِنْ لَمْ يَكُنْ صَرَفُ النَّوَى مَتَلَايِمَا
 إِلَيْكَ فَرُدِّي مِنْ نَوَالِكِ فَطَايِمَا
 وَأَنْتِ بِأُخْرَى لَا تَبْعُثْكِ هَاسَائِمَا
 وَيَعْبُدُ عَلَيْهِ لَا مَحَالَةَ ظَالِمَا
 فَنَفْسُكَ وَلِ اللَّوْمِ إِنْ كُنْتَ لَايِمَا
 بِأَنْ ضَرَّ مَوْلَاهُ وَأَصْبَحَ سَاسَائِمَا
 وَمَنْ يَعُو لَا يَعْدُمُ عَلَى الْعَيِّ لَايِمَا
 وَيُجْشِمُ مِنْ لَوْمِ الصَّدِيقِ الْمَجَاشِمَا
 وَقَدْ تَعْتَرِي الْأَحْلَامُ مَنْ كَانَ نَائِمَا

(56) 訳

- 1- 貴女の無事を祈る、ファータィマよ、今日、私と決して別れないで欲しい。貴女との親密な絆が保たれる限り、何時までも分かれなくておくれ。
- 2- バクル族の娘が浜藁の枝で作られた（弓で）お前の心を射止めたが、我らのラクダは長旅で目をくぼませ、ダチョウのように、くじけず走りつづけた¹⁾。
- 3- 彼女は（部族の）旅立ちの日、我らに長く垂れ下がった髪と、まだ重なりあっていない歯並びの甘美な（口）を見せてくれた²⁾。
- 4- 太陽に照らされている牧場に、雨雲の塊が忍び寄って彼女の口をうるおす。すなわち、（その黒い雨雲の）下にある白い雲が彼女の口に唾液を注ぐ³⁾。
- 5- ザート・アッダールで彼女は手首と、まるで、銀製の鏡のような柔らかな頬をお前に見せた。
- 6- 彼は彼女への溺愛の酔いから覚めるが、ひとたび彼女への思いが心に浮かぶと、立っていても大地とともに回っているように感じた⁴⁾。
- 7- わが友よ、見たまえ。ラクダの籠に乗った女性らが急いで旅立っていく姿を見るだろう。彼女らがゆったりとした乗り物に座っている姿を（見るであろう）。
- 8- 彼女らはアルワリーアの窪地から、日が高くなったあと移動し、孤立した砂山を越えて行った。

1) ここではバクル族の娘となっていて、ラフム朝のアルムンジル三世の娘ファータィマとは言っていない。dāla は dāl の個体名詞で「野生の sidr (浜藁)」のこと。

2) 詩人の甥にあたるタラファのムアッラカ8-9行では唇や歯の見事さを詠んでいるが、この行と次の行をまねたものであろう。

3) 彼女の唾液を雨雲が降らす雨になぞらえている。

4) 3人称に変わっているが、よくある手法である。この1行は他の部分とそぐわず、おそらく他の詩から引用したもので、5行目の次には11-13行が続くものと考えられる。

- 9- 彼女らは、ルビーや黄金の数珠球や金細工のアクセサリーやザファール産のシマメノウや、二つずつ並んだ真珠などで装っていた⁵⁾。
- 10- 彼女らは村々に沿って旅をつづけ、溪谷の屈曲部を通り過ぎ、カウウの地をあとに、ラクダを駆り立てながら旅路を急いだ。
- 11- ああ、彼女が我らに見せた白く輝く顔と、垂れ下がった髪房はなんと美しかったことよ。髪房は漆黒で綱のようであった。
- 12- 私は空腹でやせているときの自分が、愛しいファーティマにたいして恥ずかしい。また、良く食べ(太っているときの自分も)、愛しい彼女にたいして恥ずかしい(いつも恥じているの意味)⁶⁾。
- 13- 私は、そなたとの間を砂漠がはるかに隔てているとはいえ、貴女に対して恥ずかしい。私の兄弟が(貴女を訪ね)貴女が彼に会うと、(私の悪口を告げ)貴女との絆を切るのを恐れているからである。
- 14- 私は、たとえ私の若い雌ラクダが疲労し衰弱していても、ラクダと私自身を、ファーティマよ、(石を投げるように)急行させる。
- 15- おお、ファーティマよ、まことに恋心と言うものは、相手の憎悪でかえって強まり、名誉を守る貴人らに重荷を課するものだ⁷⁾。
- 16- たとえ、貴女が遠くに移り、私と隔てられても、穏やかな星のもとで、ファーティマよ、安らかであれ⁸⁾。
- 17- おお、安らかであれ、ファーティマよ、私が望むのはそなたであることを知ってくれ。ゆえに、そなたも好意でもって応えてくれ。
- 18- ファーティマよ、もしも女たちがある土地にいて、そなたは別の土地にいるのであれば、私は熱い恋心を抱いて、そなたの後を追うであろう。
- 19- 愛しい女性は思いのまま、親しい男との絆を断ち、わけもなく不当に立腹するが、これは避けられないものだ⁹⁾。
- 20- ジャナーブが誓い、お前は彼の求めに応じた。よって、非難するならお前自身に矛先を向けよ¹⁰⁾。
- 21- まるでジャナーブはムハッリク家の王冠をいただき、友には悪事をなして、自身は無事であったかのようにだ¹¹⁾。
- 22- 善行をなすものの行いは、人々が褒める。また、道に迷った者の行いを非難する人々が欠ける事はない。
- 23- 君は見ないか、男たるものは友の非難を受けないためなら、みずからの手首をも切

5) 「ザファール (Zafār)」はアルヤマンのヒムヤル王国の首都があったところで、サヌアの南の出岳地帯にあり、現在は遺跡しか残っていない。ハドラウマウトの海岸地帯にも同じ地名があるが、メノウの産地は「内陸部の」ザファール。

6) 「フタイマ (Fuṭayma)」は「ファーティマ (Fāṭima)」の縮小形。

7) ḥabbu shay'in ʾila l-ʾinsāni mā muni'a 「人々にとって最も好ましいものとは拒まれたもの」という諺と同じ意味。アルマルズーキーによって追加された1行。

8) kawkab. レインの辞書には各種の意味が挙げられているが、「穏やかで慈雨を降らせ、涼しい風を招く星」というような意味であろう。

9) dhu l-wuddi は「愛する男」ではなく、「愛される女」の意味であろう。

10) この1行は前後と全く関係がない。「まえがき」の逸話が参考になる。

11) ムハッリク (Muḥarriq) 家とはアルヒーラのラフム王家のことであるが、ジャナーブが王として振舞ったということが、詩人とファーティマとにどのような関係があるのか全く不明である。

り離し、いかなる難事をも引き受けるのを。

24- お前が悲しみのあまり地面に線など引いているのは、夢によるものか。夢は眠っている者にときに訪れるものだが。

— (57) アルムラッキシュ・アルアスガル —

المُرْقَش الأصغر

まえがき

この詩では再びアジュラーンの娘 (Bint °Ajlān) が登場する。すなわち、彼女がかつて住んだテント跡や彼女への思い出が、まず、取り上げられる (1-10行)。次いで、星を見上げているところに彼女の幻が訪れ、不眠に陥ったと詠む (11-14行)。次に話題が突如変わり、非難する者への詩人の返答が語られるが、おそらく大幅な脱落部分があったものと推測される。最後の部分は運命の移ろいやすさを取り上げている。

この詩はアルアンバーリーのテキストでは20行となっているが、カイロ版ではアルマルズキーにより、3行および8行の2行が追加されて、全体で22行となっている。古い時代の詩人達が好んだとされるバシート調 (一部に韻律が乱れている) が用いられている。

(57) テキスト

وَقَالَ الْأَصْغَرُ أَيْضًا

- | | |
|---|--|
| لَمْ يَتَعَفَّ ————— يَنْ وَالْعَهْدُ قَدِيمٌ | ١- لَابْنَةُ عَجْلَانَ بِالْجَوِّ رُسُومٌ |
| وَأَيُّ حَالٍ مِنَ الدَّهْرِ تَدُومُ | ٢- لَابْنَةُ عَجْلَانَ إِذْ نَحْنُ مَعَا |
| عَيْنُكَ مِنْ رَسْمِهِ ————— بِسَجُومٍ | ٣- أَمِنْ دِيَارٍ تَعَفَّى رَسْمُهَا |
| فِي سَالِفِ الدَّهْرِ أَرْبَابُ الْهَجُومِ | ٤- أَضَحَتْ قِفَارًا وَقَدْ كَانَ بِهَا |
| أَحْسَبُنِي خَالِدًا وَلَا أَرِيْمُ | ٥- بَادُوا وَأَصْبَحْتُ مِنْ بَعْدِهِمُ |
| عَلَى خُطُوبٍ كَنَحْتٍ بِالْقُدُومِ | ٦- يَا ابْنَةَ عَجْلَانَ مَا أَصْبَرَنِي |
| نَشٍّ مِنَ الدَّنِّ فَالْكَأْسُ رَدُومُ | ٧- كَأَنَّ فِيهَا عُقَارًا قَرَقَفًا |
| شَنْ مُنْوَطٍ بِأَحْرَابِ هَزِيمِ | ٨- شَنَّ عَلَيْهَا بِمَاءٍ بَارِدٍ |
| فِيهَا كِبَاءٌ مُعَدُّ وَحْمِيمِ | ٩- فِي كُلِّ مُمَسًى لَهَا مِقْطَرَةٌ |
| تُوقِظُ لِلزَّادِ بَلْهَاءٌ نُؤُومُ | ١٠- لَا تَصْطَلِي النَّارَ بِاللَّيْلِ وَلَا |
| وَلَمْ يُعْنِي عَالِي ذَاكَ حَمِيمِ | ١١- أَرْقَنِي اللَّيْلَ بَرْقُ نَاصِبٍ |
| أَشْعَرَنِي أَلْهَمَ فَالْقَلْبُ سَقِيمِ | ١٢- مَنْ لِحْيَةٍ أَلِ تَسْدَى مَوْهِنًا |
| قَدْ كَرَّرْتَهَا عَلَى عَيْنِي الْهُمُومُ | ١٣- وَلَيْلَةٍ بِتُّهَا ————— مُسْهَرَةٌ |

- ١٤- لَمْ أَغْتَمِضْ طَوْلَهَا حَتَّى انْقَضَتْ
 ١٥- تَبْكِي عَلَى الدَّهْرِ، وَالْدَّهْرُ الَّذِي
 ١٦- فَعَمَّرَكَ اللَّهُ هَلْ تَذَرِي إِذَا
 ١٧- تُؤْذِي صَدِيقًا وَتُبْدِي ظَنَّةً
 ١٨- كَمْ مِنْ أَخِي ثَرَوَةٍ رَأَيْتُهُ
 ١٩- وَمِنْ عَزِيزِ الْحِمَى ذِي مَنْعَةٍ
 ٢٠- بَيْنَنَا أَخُو نِعْمَةٍ إِذْ ذَهَبَتْ
 ٢١- وَبَيْنَنَا ظَاعِنٌ ذُو شُقْمَةٍ
 ٢٢- وَلِلْفَتَى غَالِلٌ يَعُولُهُ
 أَكَلُوْهَا بَعْدَ مَا نَامَ السَّلِيمُ
 أَبْكََاكَ فَالْدَّمْعُ كَالشَّيْنِ الْهَزِيمِ
 مَا لُمْتَ فِي حُبِّهَا فِيمَ تَلُومُ
 تُحَرِّزُ سَهْمًا وَسَهْمًا مَا تَشِيمُ
 حَلَّ عَلَى مَالِهِ دَهْرٌ غَشُومٌ
 أَضْحَى وَقَدْ أَثَّرَتْ فِيهِ الْكُلُومُ
 وَحَوَّلَتْ شِقْوَةً إِلَى نَعِيمٍ
 إِذْ حَلَّ رَحْلًا وَإِذْ خَفَّ الْمُقِيمُ
 يَا ابْنَةَ عَجَلَانَ مِنْ وَقَعِ الْخُنُومُ

(57) 訳

- 1- アルジャウウには、かつてアジュラーンの娘が住んでいたテントの跡がいまだ消えずに残っている。
 2-(それは) 我らがともに住んでいたところのアジュラーンの娘の住まい跡だが、一体、いかなるものが永遠に姿を変えずに続くものか。
 3- 跡形が消えなかった (彼女の) 住まい跡を見て、お前はとめどなく涙を流すのか?
 4-(彼女の住まい跡は) 今や荒れ果てているが、かつては数百頭のラクダの持ち主たちがそこに住んでいた。
 5- だが、彼らはすべて消え去った。私は彼らの後、(自分は) いつまでも生きつづけ、止むことはないと思っていた。
 6- アジュラーンの娘よ、手斧で断ち切るような難事に私はなんとよく耐えてきたことだろうか。
 7- 彼女 (の口) の中には、まるで、土器からにじみ出た、飲むと身震いするようなぶどう酒が入っていて、杯があふれているようだ。
 8- 取っ手で吊るされた穴の開いた使い古しの水袋が、そのブドウ酒に水を混ぜているようだ。
 9- 毎夕、彼女は自身を焚き込める吊り香炉を持っていて、乳香が用意され、(入浴するための) 湯が沸かされている。
 10- 彼女は夜中に起きて火を焚くようなこともなく、食事の用意をするために起こされることもなく、(家事に) うとく、眠たいだけ眠る¹⁾。
 11- その夜、私は雷光で眠れず、これを見てくたびれたが、(私の苦痛を) やわらげてくれる友はいなかった。
 12- 夜がひと時過ぎたころ、(私を訪れる) 幻から誰が(私を助けてくれようか)。幻は苦

1) この女性は贅沢な生活をしており、恋物語のアジュラーンの娘のような、侍女にはそぐわないもので、ファーティマのような皇女にふさわしい生活描写である。

悩の下着で私を覆い、ゆえに、私の心は病んでしまった。

- 13- 私は幾たびも眠れぬ夜を過ごした。幾たびも不安が私の目に反復したものだ。
- 14- 私は夜が明けるまで目を開じなかった。気苦勞のない者らが眠ってしまった後、私は空の星を眺めて過ごした²⁾。
- 15- お前は運命に泣くが、運命こそはお前を泣かせたものである。お前の涙は古い皮袋の穴から水が流れるようにしたたる³⁾。
- 16- 神がお前に長寿を授けますように。お前は私が彼女を愛していると咎めたが、一体何を咎めているのか、分かっているか⁴⁾。
- 17- お前は友人を傷つけ、彼への嫌疑を言い立てているが、お前は矢筒に一本の矢を入れたり、出したりしている無為徒食漢のようだ。
- 18- 私は、圧倒する運命の魔手によって財産を損なわれた富豪らをしばしば見てきた。
- 19- 守りの堅い有力者らが、(運命の魔手で) 数々の傷跡をつけられた (のをしばしば見てきた)。
- 20- 富める者の富が消えるかと思えば、惨めな者が裕福な身分に変えられる (これも運命をつかさどる神のなせる業)。
- 21- 遠くへ旅立つ者が旅先で鞍を解き、そこに住み着くかと思えば、あるところに住んでいた者が急いで旅立つ。
- 22- 運命が定まるとき、おお、アジュラーンの娘よ、男には彼を消し去る殺人者が控えているものだ。

2) 「サリーム (salīm)」は「サソリに刺された者の婉曲な言い回し」と解説にあるが、「気苦勞のない者」のほうの意味はよく通る。

3) ここで急に「お前」と人称の変化が見られるが、おそらく前後に脱落部分があるものと考えられる。

4) ここの「お前」は非難をしている人物で、15行の「お前」とは関係ない。

—— (58) アルムラッキシュ・アルアスガル ——

المُرْقَشُ الأصغر

まえがき

ある日、タグリブ族の男アルムハルヒル (al-Muhalhil) が詩人と従兄弟のサアラバ・ブヌ・アムル (Tha'labā b. °Amr) と出くわし、アルムハルヒルはサアラバを殺した。そこで詩人は、復讐するまでは顔を洗わないと誓った。やがて、詩人はタグリブのアムル・ブヌ・アウフ (°Amr b. °Awf) という男と出会い、これを殺して仇をうった。

この詩はわずか2行しか伝えられていないが、アルアンバーリーは、この詩はアルムラッキシュ・アルアクバルの作であるとしている。前記の復讐事件はアブーイクリマ (Abū °Ikrima) がこの詩の詠まれた背景をなす事件として伝えているものだが、アルアンバーリーの主張が正しいと思われる。No.54の7-8行がこれを支持している。また、サアラバはムラッキシュ・アルアスガルの従兄弟ではなく、ムラッキシュ・アルアクバルの従兄弟である。ムタカーリブ調、2行。

(58) テキスト

وَقَالَ الْمُرْقَشُ

- ١- أَبَأْتُ بِشَعْلَبَةَ بْنِ الْحُشَا مِ عَمْرُو بْنِ عَوْفٍ فَرَاحَ الْوَهْلِ
٢- دَمًا بِدَمٍ وَتُعَفَّى الْكُلُومُ وَلَا يَنْفَعُ الْأَوَّلِينَ الْمَهْلُ

(58) 訳

- 1- 私はサアラバ・ブヌ・アルフシャームの仇アムル・ブヌ・アウフを殺した。かくして、恐怖は去った¹⁾。
2- 血には血を。(復讐で) 傷は癒される。先に殺した者にとり (復讐されると)、殺害先行は無益となる。

1) アルフシャーム al-khushām 「大きな鼻」。サアラバ・ブヌ・アムル (Tha'labā b. °Amr) の綽名。

— (59) アルムラッキシュ・アルアスガル —

المُرْقَشُ الْأَصْغَرُ

まえがき

この詩は、アラブの基本的徳目とされている気前よさを誇ったものである。ここでは妻が夫の気前よさは財産を損なうことになる苦情を言ったのに対して、生きてゆく糧は天与によるもので、これを元手として増やすべきものではない、自分の財産がなくなるまで他人に気前よく振舞うのが美徳との考えが伺える。ハフイーフ調、6行。なお、この詩集全体でハフイーフ調の詩は No.48とこの詩のみである。

(59) テキスト

وَقَالَ الْأَصْغَرُ أَيْضًا

- | | |
|---|---|
| بَاكِراً جَاهَرْتُ بِحُطْبٍ جَلِيلٍ | ١- آذَنْتُ جَارَتِي بِوَشْكِ رَحِيلٍ |
| أَتْلَفُ الْمَالَ لَا يَدُمُ دَخِيلِي | ٢- أَرْمَعْتُ بِالْفِرَاقِ لَمَّا رَأْتَنِي |
| إِزْتُ مَجْدٍ وَجَدْتُ لِأَصِيلٍ | ٣- إِرْبَعِي إِنَّمَا يَرِيئُكَ مَيِّ |
| لَ وَرَيْبُ الزَّمَانِ جَمُّ الْحُبُولِ | ٤- عَجَبًا مَا عَجَبْتُ لِلْعَاقِدِ الْمَا |
| مِنْ شَقَاءٍ أَوْ مُلْكٍ خُلِدٍ بِحِيلٍ | ٥- وَيُضِيعُ الَّذِي يَصِيرُ إِلَيْهِ |
| لَا يَرُدُّ التَّرْقِيحُ شَرْوَى فَيْلٍ | ٦- أَجْمِلِ الْعَيْشَ إِنَّ رِزْقَكَ آتٍ |

(59) 訳

- 1- 私の妻は早朝、急ぎ旅立つと知らせ、(私と離婚するとの) 大事を公言した¹⁾。
- 2- 彼女は、私が客に吝嗇だと咎められないようにと金をつぎ込むのを見て、離婚を決意したのである²⁾。
- 3- 平静に控えよ、そなたの思案を乱しているのは、私の輝かしい出自と高尚な心を持った私の祖先によるものであろう³⁾。

1) jārat-ī「私の隣の女」とは妻のこと。Lisān al-ʿArab には al-marʾa jāratu zawji-hā「妻は夫の隣の女」とある。アラブの女性は離婚する自由を大幅に持っていたことが分かる。夫の向こう見ずな気前よさも、離婚の理由とされている。

2) dakhīl とは「庇護を求めて身を寄せた者」。このような者は歓待して保護するのが慣行となっていた。

3) jadd「祖父、祖先」を jidd「努力」と読むと、訳は「私の気高い心の働き」となるであろう。

- 4- 私は金を集めるだけで費やさぬ者に、大いに驚いている。時世の移り変わりは災難で満ちているのだ。
- 5- 時世の転変は、惨めな境遇の者も極楽のような生活をしている大富豪も、ことごとく破滅させる。
- 6- よって、立派に生きよ。さすれば糧に恵まれよう。(財産を) 上手に運用したところで、椰子の実の薄皮ほどのもの (わずかな災難) すら避けることは出来ないのだ。